所を彼は此等の愕くべき空想譚に對して、恰も眼前に展開する活動寫眞を凝視して筆記する樣な態度で書き卸してゐる。

ポーは又短篇作家として有名な男である。今でも短篇を論ずるときにポーの引合に出ぬ場合は殆んどない。此點から見てポーは所謂三卷小說の例を打破した獨創的作家と云つても好い。從つて其作物は歷史的價値がある。長短に關して小說の比較研究をしやうと思ふものは是非共一度はポーを通つて來なければならない。

現今は短篇小說が大分流行して來た。其元祖はポーである。ブレツト、ハートである。さうして兩人とも亞米利加人であるのは從來人の屢注意した事實である。現代の短篇小說が果して此二人の亞米利加人の大影響を蒙つて發達したものか、又は時代の趨勢が此種の產出を已むなく作家に促がした自然の結果であるかは、しばらく論ぜずとするも彼が短篇作家として一體を創開した功績は歷史的に永く記憶すべき事實である。

本間君がポーの短篇集を出版さるゝに就て余に序を徵せられた。余の不學なるは前に述べた通であるから、本間君の譯文に序を書く程の資格はないと思つてゐるが、以上の理由で、本間君の勞力は、わが文界に對して決して貢獻する所のない仕事とは認められない。そこで數言を述べて本間君の爲に此序を作る。

四十年九月

——四〇、一一、一五——

『草雲雀』序

森田草平
生田長江　川下江村
共著

草雲雀の著者森田、生田、川下の三君が揃つて大學を出たのは去年の事である。從つて此集は三君が在學中の餘暇になつた短篇のみを收めたものに過ぎぬ。

然し在學中の餘暇になつたものには、人の知れぬ苦心と勞力が籠つてゐる。寸陰を惜み分陰を偸んで漸くに草し得た一句一行は、閑居平日の縷々數萬言よりも貴重である。從つて最も切實な言語より外は臚列せぬ事となる。草雲雀は三君に取つて實に此種の感懷に富んだ作物のみであらうと思はれる。卽ち講學の煩しき朝夕にさへ、抑へんとして抑へがたき多意味なる內面生活の一端が、文學の力を藉りて、實世界の表面に發揚した自己の本色と云ふても差支なからう。此點から見ても草雲雀は只一片好奇の念に驅られた閑文字ではない。又は茫漠たる過去を忘れぬ爲めに一冊の形に纏めた記念でもない。眞摯なる述作である。之を世に公にするのは單に三君に取つて有意義なるのみならず、又世間に取つて有意義である。

先頃森田君に逢つた時、草雲雀を校正して居ると時々冷汗が出ると云はれた。其時余は成程面白いと感じた。と云ふのは、此言語が單に普通の謙遜の爲や又は自己の拙劣を自覺した爲に出たのでないからである。何故冷汗が出るかと云ふと、述作の當時は前後夢中で自己の全精神を腹藏なく作物の上に傾注して憚らなかつたから、偖筆を擱いて改つた心持で之を讀み直すと、あまり當時の自己が遠慮なく赤裸々に出て居て、自分が自分に對して面目がない樣な氣持がして冷汗が出るのである。從つて此冷汗は自己が自己の作物に對して徹底的に眞面目であつたと云ふ事を證明する以外に何等の不名譽を意味して居らぬ。從つて森田君が校正の時に流した此冷汗こそ此集を公けにして然るべき立派な理由となり得ると思ふ。

三君は在學中から「明星」に「藝苑」に相携へて寄稿もしくは編輯の筆を執つて居られた。但し專門は三君共違ふ。森田君は英文學で、生田君は美學で、川下君は獨文であつた。然し卒業も同年で、交際も伯仲で、出處も如一で、文藝上の趣味も主張も共通であるから森田君に就て云ひ得る所のものは餘の二君に就ても云ひ得る譯である。三君の作物を一卷に纏めるのは尤も其當を得たもので、三君の作物を纏めた草雲雀は前に云つた意味から公けにして世に問ふ價値のある短篇集である。

世事意の如くならず卒業後の森田君は英語の教科書を抱へて電車の昇降に忙はしく、生田君も

亦飜譯雜纂の業に役々として明窓淨几の暇なきを嘆じてゐる。川下君に至つては空しく志を九原に齎らして客舍に永眠された。三君の自得し、自證し、或は觀察し得たる人生の敍述は、此短篇にとゞまる譯ではない。否森田生田二君に在つては是からが實に文藝上の生命である。然し以上の如く二君は齷齪の活計に追なく、殘る一人は既に亡き人の數に入つたとすれば、此際「草雲雀」を出版するのは二君の面影を今日に、逝ける人の精神を永久に傳ふる好方便である。余は三君の友人として喜んで一言を草雲雀の卷頭に序するものである。

明治四十年十月

――四〇、一一、一四――

生田長江著『文學入門』序

學と名のつくものは世の中に澤山あるが、大抵は其性質も範圍も研究の態度も方法も目的も一定してゐる。從つていくら門外漢でも多少の教育さへあれば、こんなものだらう位の想像はつく。所が文學になると同じく學の字はついて居るが、理學化學動物植物の諸科學とは丸で趣を異にして極めて曖昧なものになつてゐる。學と云ふ名はあるがどこが學だか薩張り分らない。

普通の諸科學はある現象の研究から出立して此現象と彼現象との關係を明瞭に抽出するものである。では文學では何の現象を研究して居るかと云ふと一寸返事に困る。では何も研究してゐないのかと云ふと大に研究してゐる。小説でも詩歌でも戯曲でもみんな人間と自然の研究から出來たものである。たゞ研究の態度が普通の諸科學と趣を異にして居るのみである。たゞ此態度が複雜なため區域の判然せぬ爲め、研究者自身も此態度をとりまとめて人に話す事が出來ない。だから自身は述作の際此一種の研究を實行してゐるにも拘らず、一旦質問に出逢ふと滿足な返事が出

來ない。文學が曖昧な源因の一つは全く玆にある。

夫から作る方の側でなく、作つたものを取り扱ふ側――卽ち鑑賞家とか批評家とか云ふ人々の態度から云つても同樣の觀がある。此人々は作物を材料として研究するのだから、此點に於ては動物學者の動物を材料としたり、植物學者の植物を材料とするのと一般ではあるし、又現象を研究すると云ふ點から見ても似ては居るが、偖此研究の態度はと云ふと外のとは餘程違つてゐる。餘程違つて居ても、明瞭に區別が出來る樣に違つて居るのは結構であるが、こゝでも亦曖昧に違つてゐる。古來からして批評家の立場とか、觀察點を調べて見ると、毫も貫ぬいて居ない、めいめい違つて居る。單にめい〳〵違つてゐる丈ならよいが、一人が時と場合によつて違つてゐる。それも大體の計畫を立てた上、確然たる主義から割り出して、臨機應變に違つて行くなら見當もつくが矢鱈に違ふのである。行き當りばつたり違ひである。其都度々々に思ひついた事をいゝ加減に云ふ樣な違ひ方である。從つて自分で自分の研究の結果をまとめる譯にも行かず、一口に人に話す事も出來ず、又は傍觀者が是等の人の態度を一括してかう云ふ態度で研究してゐるから、普通の科學者の態度とはこゝ迄が同じで、こゝからが分岐してくると明瞭に呑み込む譯にも行かない。文學が曖昧な源因の二は玆にある。

早い話が古來から文學者抔が文學は如何なるものぞと云ふ質問に對して答へた文學の定義を見

ると餘程面白い。千差萬別である。のみならず雲を摑んで霞に腰を掛けてゐる樣な不得要領なものばかりである。それは眞赤な嘘だとは云はれない代りに成程文學はそんなものですかと合點の行くものは殆んどない。時々引用されるブルツクの定義などは其好例である。

それでも構はない。が時代が進むと構はなくない人が澤山出來てくる。構はなくない人が澤山にあると、文學とはどんなものであるか、文學上の創作とはどんな研究から出來るものか、批評とはどんな研究から出來るものか、文學の歷史とはどんなものかなどと續々問題が出て來る。續續問題の解決が必要になつてくる。

文學の性質も範圍も曖昧であつた爲め、又是等を明めやうとする樣な好奇心に富んだ傾向の人が此方面に出なかつた爲め、此種の問題は等閑に附せられて居た。現に大學に純文學科があつても其目的も課目も方法も頗るしかとした根底の上に確立されて居らんのは全く此方面に於ける智識が吾人の頭腦に乏しい爲めと云はねばならぬ。

生田君の著書は其名の示す如く文學入門である。入門ではあるが以上の如く此種の著書が拂底の今日、ことに人事百般の新智識の要求が熾なる今日の日本に在つては非常に有益なものと信ずる。余も色々な意味に於て文學の研究者である。ことに生田君の著はされた書物の內容の如き問題に就いては尠からぬ興味を有して居る。因つて數言を卷頭につらねて刊行の主意を贊成すると

共に大に之を江湖の青年の學徒に推薦するのである。

明治四十年十一月

――四〇、一一、二〇――

高濱虛子著『鷄頭』序

小說の種類は分け方で色々になる。去ればこそ今日迄西洋人の作つた作物を西洋人が評する場合に、便宜に應じて澤山な名をつけてゐる。傾向小說、理想小說、浪漫派小說、寫實派小說、自然派小說抔と云ふのは、皆在來の述作を材料として、其著るしき特色を認めるに從つて之を分類した迄である。種類は是丈で盡きたとは云へぬ。一たび見地を變れば新らしい名を發見するのは左迄困難でない。況んや向後の作物が舊來の傾向を繰返して滿足せぬ限り、時と、場合と、作家の性癖と、發展の希望とによつて生面を開きつゝ推移する限り、何派、何主義と云ふ思ひも寄らぬ名が續々出て來るのが當然である。

虛子の作物を一括して、是は何派に屬するものだと在來ありふれた範圍內に押し込めるのは余の好まぬ所である。是は必ずしも虛子の作物が多趣多樣で到底概括し得ぬからと云ふ意味ではない。又は虛子が空前の大才で在來西洋人の用を足して來た分類語では、其の作物に冠する資格が

ないと云ふ意味でもない。虚子の作物を讀むにつけて、余は不圖こんな考へが浮んだ。天下の小説を二種に區別して、其の區別に關聯して虚子の作物に說き及ぼしたらどうだらう。

所謂二種の小說とは、餘裕のある小說と、餘裕のない小說である。たゞ是丈では殆んど要領を得ない。のみならず言句にまつはると褒貶の意を寓してあるかの樣にも聞える。かたがた說明の要がある。

餘裕のある小說と云ふのは、名の示す如く逼らない小說である。「非常」と云ふ字を避けた小說である。不斷着の小說である。此間中流行つた言葉を拜借すると、ある人の所謂觸れるとか觸れぬとか云ふうちで、觸れない小說である。無論觸れるとか觸れないとか云ふ字が曖昧であつて、しかも余は世間の人の用ゐる通り好加減な意味で用ゐて居るのだから、此字に對して明かな責任は持たない積りである。只ある人々の唱へる意味に於て觸れない小說と云つたら一番はや分りがするだらうと思つて、曖昧ながらわざ〳〵此字面を拜借したのである。と云ふものは、まづ字の定義は御互の間に默契があるとして、ある人々は觸れなければ小說にならないと考へて居る。だから余はとくに觸れない小說と云ふ一種の範圍を拵らへて、觸れない小說も亦、觸れた小說と同じく存在の權利があるのみならず、同等の成功を收め得るものだと主張するのである。

觸れない小說の意味をもう少し說明しないと余の所存が貫徹しまいと思ふ。余は自己の考を述

べて、こんな風にも小說は解釋が出來るものだと讀者から認めて貰へば好い。喧嘩を賣る料簡でもなし、賣られた喧嘩を買ふ氣もない。從がつて思ふ通りを思ふ通りに述べて誤解のないやうに力めて置かなければならない。

個人の身の上でも、一國の歷史でも相互の關係（利害問題にせよ、德義問題にせよ、其他種々な問題）から死活の大事件が起ることがある。すると渾身全國悉く其事件になり切つて仕舞ふ。普通の人間の樣に行屎走尿の用は足して居るが、用を足して居るか、居らぬか氣が付かぬ位に逆上せて仕舞ふ。先達て友人が來てこんな話をした。小田原で暴風雨があつた時、村の漁船が二三杯沖へ出て居て、どうしても濤を凌いで磯へ歸る事が出來ない。村中一人殘らず渚へ出て焚火をして浮きつ沈みつする船を眺めて居る許りである。此方から繩を持つて波を切つて、向うの船へ投げ込んで、其繩を引いて陸へ上げるのが彼等の目的である。がさう思ふ樣に目的は達せられんので晩からかけて翌日の午後の三時頃迄は村中濱へ總出の儘風の中、雨の中を立ち盡して居た。所が其長時間のうち誰一人として口を利いたものがない又誰一人として握り飯一つ食つたものがないとの事である。かうなると行屎走尿すら便じなくなる。餘裕のない極端になる。大いに觸れてくる。同時に眼前焦眉の事件以外何にも眼に這入らなくなる。世界が一本筋になる。平面になる。寢返りも出來ない樣に窮屈になる。なつても構はないがそれ許りが小說になると云ふ議論が

どうして出來る。世の中は廣い。廣い世の中に住み方も色々ある。其住み方の色々を隨緣臨機に樂しむのも餘裕である。觀察するのも餘裕である。味はうのも餘裕である。此等の餘裕を待つて始めて生ずる事件なり事件に對する情緒なりは矢張依然として人生である。活潑々地の人生である。描く價値もあるし、讀む價値もある。觸れた小說と同じく小說になる。或人は淺いと云ふかも知れない。淺いと云ふ點に於ては余も同感である。然し價値がないと云ふ意味に於て淺いと云ふなら間違つて居る。此場合に於ける深いとか淺いとか云ふのは色の濃いとか薄いとか云ふのと一般で、濃いから上等で薄いから下等と云ふ評價のつけられる譯のものでは勿論ない如く毫も作物を高下する索引にはならないのである。

護謨を延ばして、今少し引つ張ると切れると云ふ所迄構はず持つて行く。惡いとは云はない。然し此所迄引つ張つてぴんとさせなくつちや駄目だよと云ふに至つては、緊張の趣は解して居るが雍容の味は解し得ない人だと云はれても仕方がない。のびない護謨もゆとりがあつて面白いと云ふ人を屈服させる譯には行かない。

茶を品し花に灌ぐのも餘裕である。冗談を云ふのも餘裕である。繪畫彫刻に閒を遣るのも餘裕である。釣も謠も芝居も避暑も湯治も餘裕である。日露戰爭の永續せざる限り、世閒がボルクマンの樣な人閒で充滿しない限りは餘裕だらけである。而して吾人も已を得ざる場合の外は此餘裕

を喜ぶものである。從つて此等の餘裕より生ずる材料は皆小說となつて適當である。（喜ぶから小說になると云ふと小說は娛樂の爲めと云ふ意味になる。此を詳しく說明しやうとすると小說の目的と云ふ議論になる。機會を見て余は此點に關する自己の意見を述べたいと思ふが、今は詳說する遑がないから別に云はぬ。只小說は娛樂を目的にしてはならぬと云ふ議論は成立せぬ。從つて娛樂も亦小說の一目的として存在し得るものだと許り一言して置く。）

以上は餘裕ある小說の說明である。既に餘裕ある小說を說明した以上は餘裕なき小說も大概其意味が分つた筈であるが。一言にして云ふとセツパ詰つた小說を云ふのである。息の塞る樣な小說を云ふのである。一毫も道草を食つたり寄道をして油を賣つてはならぬ小說を云ふのである。呑氣な分子、氣樂な要素のない小說を云ふのである。たとへばイブセンの脚本を小說に直した樣なものを云ふのである。大いに觸れたものを云ふのである。所謂イブセンの書いたもの抔は先づ吾人の一生の浮沈に關する樣な非常な大問題をつらまへて來て其問題の解決がしてある。しかも其解決が普通の我々が解決する樣な月並でなくつてへえと驚ろく樣な解決をさせる事がある。人は之を稱して第一義の道念に觸れるとも、人生の根元に徹するとも評して居る。成程吾々凡人より高く一隻眼を具して居ないとあんな御手際は覺束ない。只此點丈でも敬服の至りである。然し斯樣に百尺竿頭に一步を進めた解決をさせたり、月並を離れた活動を演出させたり、篇中の性格

を裏返しにして人間の腹の底にはこんな妙なものが潜んで居ると云ふ事を讀者に示さうとするには勢ひ篇中の人物を度外れた境界に置かねばならない。餘裕をなくなさなくつてはならない。セツパ詰らせなくつてはいけない。そこで大抵は死活問題が出てくる。一世の浮沈問題が持ち上がつて來る。（必ずとは云へない。人間は一寸風を引いたのが動機になつて内的生活に一革命を起さぬとは限らぬ。然し大體の傾向はと云ふと以上の如くである。）

斯樣に小説を二つに分けて見た所で虚子の小説はどつちに屬するかと云ふと先づ前者即ち餘裕のある方面に屬すると思ふ。其餘裕のある所が、ある一派の人から見て氣に入らぬ所であらうと思はれる。だからどんな所に餘裕があると云ふ事を説明したらば、是等の人々の誤解を防いで、幾分か虚子の長所を發揮する方便になるだらうと思ふ。之を説明するには例を引くのが早分りである。

文章に低徊趣味と云ふ一種の趣味がある。是は便宜の爲め余の製造した言語であるから他人には解り樣がなからうが先づ一と口に云ふと一事に即し一物に倒して、獨特もしくは連想の興味を起して、左から眺めたり右から眺めたりして容易に去り難いと云ふ風な趣味を指すのである。だから低徊趣味と云はないでも依々趣味、繼々趣味と云つてもよい。所が此趣味は名前のあらはす如く出來る丈長く一つ所に佇立する趣味であるから一方から云へば容易に進行せぬ趣味である。

換言すれば餘裕がある人でなければ出來ない趣味である。聞人が買物に出ると途中で引かゝる。交番の前で鼠をぶら下げて居る小僧を見たり、天狗連の御淩へを聽いたりして肝腎の買物は中々辨じない。所が忙がしい人になると、そんな餘裕はない。買物に出たら買物が目的である。買物さへ買へば、それで目的は達せられたのである。小説も其通りである。篇中の人物の運命、ことに死ぬるか活きるかと云ふ運命丈に興味を置いて居ると自然と餘裕はなくなつてくる。從つてセツパ詰つて低徊趣味は滅じて來る。

そこで低徊趣味も客觀的とか主觀的とか區別すれば色々になるが、それは面倒だから暫らく云はぬとしても、虚子の小説には此餘裕から生ずる低徊趣味が多いかと思ふ。或人は云ふかも知らぬ虚子の小説は皆短篇である。所謂低徊趣味は長篇ならば兎に角、こんな短かいものにそんな趣味のあらはれる譯がないと。所が事實は反對である。長いものになると、さう單調に進行する事が出來んから、自然だれの作物でも餘事が混入してくるし、又頁の數から云つても餘裕は出來易い。だから長篇ものに所々此趣味が散點して居ても、取り立てゝこれが作者の趣味だと言ひ切る譯には行かない。所が短篇ものになると頁數に限りがある。其限りがあるうちで人の眼につく樣に此趣味を出すと云へば作者の嗜好は判然として爭ふべき餘地はない。

虚子の風流懺法には子坊主が出てくる。所が此小坊主がどうしたとか、かうしたとか云ふより

も祇園の茶屋で歌をうたつたり、酒を飲んだり、仲居が緋の前垂を掛けて居たり、舞子が京都風に帶を結んで居たりするのが眼につく。言葉を換へると、虚子は小坊主の運命がどう變つたとか、どうなつて行くとか云ふ問題よりも妓樓一夕の光景に深い興味を有つて、其光景を思ひ浮べて戀戀たるのである。此光景を虚子と共に味はう氣がなくつては、始から風流懺法は物にならん。斑鳩物語も其の通である。所は奈良で、物寂びた春の宿に梭の音が聞えると云ふ光景が眼前に浮んで飽く迄これに耽り得る丈の趣味を持つて居ないと面白くない。お道さんとか云ふ女がどうしましたねとお道さんの運命ばかり氣にして居ては極めて詰らない。樂屋も其通り。なかに出てくる吉野さんよりも能の樂屋の景色や照葉狂言の樂屋の景色其物に興味がないと極めて物足らない小說になるかも知れぬ。勝敗は多少意味が違ふが兎に角腕白な子供と爺さんの對話其物に低徊拍掌の感を起さなくては意味さへ分らなくなる。子供と爺さんが夫から先どうなつたにも、かうなつたにも丸で頭も尻尾もありやしない。八文字に至つては其極端である。

かう云ふ立場からして讀んで見ると虚子の小說は面白い所がある。我々が氣の付かない所や言ひ得ない樣な所に低徊趣味を發揮して居る。此集には見えないが京の隧道を舟で拔ける所抔は未だに余が頭に殘つて居る。其代り人間の運命と云ふ事を主にして見ると、あまり成功して居らん。只大内旅宿丈はうまく出來て居る。然しこゝには低徊趣味が全然缺乏して居る。（なぜ大内旅宿

が成功して居るかを說明したいが、長くなるからやめる。大内旅宿抔は無餘裕派の人で一言も批評をした事がない樣であるが、あれは一見平凡な運命をかいたやうで、そのうちに大いなる曲折と出來る限りの複雜の度を含んで居る。それであれ程の頁で濟んで居るから低徊趣味のないのも無理はない。）

余は小說を區別して餘裕派と非餘裕派としてイブセンを後者の例に引いた。で前云つた通り此種の小說の特色としては人生の死活問題を拉し來つて、切實なる運命の極致を寫すのを特色とする。讀者は此點を擧げて此種の作物を謳歌し、余も亦此點に於て此種の作物に敬服する。所で此種の作物に對する賞讃の辭を聞くと第一義とか、意味が深いとか、痛切とか、深刻とか云つて居る。余は此賞讃の辭に對して是非を爭ふ料簡はない。ないがこれが小說の極致であるかと問はれると、さうさなと首を傾けざるを得ない。成程是等の作物は第一義の道念に觸れて居るかも知れぬ。然し其第一義といふのは生死界中に在つての第一義である。どうしても生死を脫離し得ぬ煩惱底の第一義である。人生觀が是より以上に上れぬとすると是が絕對的に第一義かも知れぬが、もし生死の關門を打破して二者を眼中に措かぬ人生觀が成立し得るとすると今の所謂第一義は却つて第二義に墮在するかも知れぬ。俳味禪味の論がこゝで生ずる。

余は禪といふものを知らない。昔し鎌倉の宗演和尙に參して父母未生以前本來の面目はなんだ

と聞かれてぐわんと參つたぎりまだ本來の面目に御目に懸つた事のない門外漢である。だからこに禪味抔といふ問題を出すのは自分が禪を心得て居るから云ふのではない。智識のかいたものに悟とはこんなものであるとあるから果してそんなものなら、かう云ふ人生觀が出來るだらう。かう云ふ人生觀が出來るならば小說もこんな態度にかけるだらうと論ずるまでゞある。

禪坊主の書いた法語とか語錄とか云ふものを見ると魚が木に登つたり牛が水底をあるいたり怪しからん事許りであるうちに、一貫して斯ふ云ふ事がある。着衣喫飯の主人公たる我は何物ぞと考へ〳〵て煎じ詰めてくると、仕舞には、自分と世界との障壁がなくなつて天地が一枚で出來た樣な虛靈皎潔な心持になる。それでも樗はず元來吾輩は何だと考へて行くと、もう絕體絕命につちもさつちも行かなくなる、其所を無理にぐい〳〵考へると突然と爆發して自分が判然と分る。分るとかうなる。自分は元來生れたのでもなかつた。又死ぬものでもなかつた。增しもせぬ、減りもせぬ何んだか譯の分らないものだ。

しばらく彼等の云ふ事を事實として見ると、所謂生死の現象は夢の樣なものである。生きて居たとて夢である。死んだとて夢である。生死とも夢である以上は生死界中に起る問題は如何に重要な問題でも如何に痛切な問題でも夢の樣な問題で、夢の樣な問題以上には登らぬ譯である。從つて生死界中にあつて最も意味の深い、最も第一義なる問題は悉く其光輝を失つてくる。殺され

ても怖くなくなる。金を貰つても難有くなくなる。辱しめられても恥とは思はなくなる。と云ふものは凡て是等の現象界の奧に自己の本體はあつて、此流俗と浮沈するのは徹底に浮沈するのではない。しばらく冗談半分に浮沈して居るのである。いくら猛烈に怒つても、いくらひい〳〵泣いても、怒りが行き留りではない、涙が突き當りではない。奧にちやんと立ち退き場がある。いざとなれば此立退場へいつでも歸られる。しかも此立退場は不增である、不減である。いくら天下樣の御威光でも手のつけ樣のない安全な立退場である。此立退場を有つて居る人の喜怒哀樂と、有たない人の喜怒哀樂とは人から見たら一樣かも知れないが之を起す人之を受ける人から云ふと莫大な相違がある。從つて流俗で云ふ第一義の問題も此見地に住する人から云ふと第二義以下に墮ちて仕舞ふ。從つて我等から云つてセツパ詰つた問題も此人等から云ふと餘裕のある問題になる。

所謂禪味と云ふものを解釋した人があるかないか知らないが、禪坊主の趣味だから禪味と云ふのだらう。さうして禪坊主の悟りと云ふものが彼等の云ふ通りのものであつたなら余の解釋に間違はなからうと思ふ。して見ると禪味と云ふ事は暗に餘裕のある文學と云ふ意味に一致する。さうしてその餘裕は生死以上に第一義を置くから出てくる。

余は虛子の小說を評して餘裕があると云つた。虛子の小說に餘裕があるのは果して前條の如く

禪家の悟を開いた爲かどうだか分らない。只世間ではよく俳味禪味と竝べて云ふ樣である。虛子は俳句に於て長い間苦心した男である。從がつて所謂俳味なるものが流露して小說の上にあらはれたのが一見禪味から來た餘裕と一致して、こんな餘裕を生じたのかも知れない。虛子の小說を評するに方つては是丈の事を述べる必要があると思ふ。

尤も虛子もよく移る人である。現に集中でも秋風なんと云ふのは大分風が違つて居る。それでも比較的痛切な題目に對する虛子の敍述的態度は依然として餘裕がある樣である。虛子は畢竟餘裕のある人かも知れない。

明治四十年十一月

——四一、一、一——

松根東洋城選『新春夏秋冬』春之部序

啓

新春夏秋冬のうち春の部御脫稿のよし奉賀候。一句入御覽候。

青柳の日に綠なり句を撰む

——四一、六、一〇——

沼波瓊音
天生目杜南 共編

『古今名流俳句談』序

天生目君令閨醫藥の料の爲に、『名流俳句談』を草せられたる由を承はり、御望みの如く一句を呈し奉る

文を賣りて藥にかふる蚊遣かな

――四一、八、二八――

松根東洋城選

『新春夏秋冬』夏之部序

東洋城は俳句本位の男である。あらゆる文學を十七字にしたがる許ではない、人世卽俳句觀を抱いて、道途に呻吟してゐる。

時々來ては作りませうと催促する。題を課して遣つて見ると頗る遲吟である。君の句には厭味がある抔と云ふと、中々承知しない。あなたのは十八世紀だと云つて、大變新しがつてゐる。

さう說明されて見ると、左樣(そ)んな所もあるやうにも思はれる。實の所余は近來俳句に全く興味を失つて、其後の動靜を頓と辨へない老骨である。運座は無論の事出ない。斯樣にして追々十七字と緣が遠くなつて、漸く忘れ掛けると東洋城が遣つて來るのである。

近頃は流石の東洋城もさあ作りませう抔と筆紙を突き付けなくなつた。たま〳〵、此方から、おい、斯う云ふのは何うだいと意見を提出すると、ふゝんなんて輕蔑する事がある。そこで俳句の話はせぬ事にした。

所が新春夏秋冬の第二卷が出來たので、序を書いて呉れろといふ注文を出した。どうも書く資格がない樣な氣がする。けれども東洋城と余は俳句以外に十五年來の關係がある。向ふでは今日でも余を先生々々といふ。余も彼の髭と金緣眼鏡を無視して、昔の腕白小僧として彼を待遇してゐる。どうも書くのは御免だと斷わる資格も無い樣な氣もする。それで逡巡してゐると又催促が來た。そこでとう〳〵書く。然し俳人として書くのでは無論ない。その昔し東洋城に始めて俳句を敎へた事があるといふ緣故によつて書くのである。東洋城の人世卽俳句觀は少なくとも此序に及んで居らん事を讀者に於て承知されたい。

とかくして鶯藪に老いにけり

四十二年二月二日

——四二、三、五——

松根東洋城選『新春夏秋冬』秋之部序

麻の夜着を腹の上に掛けて、仰向に兩手を合掌してゐる所へ東洋城が來て、新春夏秋冬の秋の部の序を書けと逼る。病氣だから序は書けないよ、と云つて一句を口吟む。

初秋の芭蕉動きぬ枕元

八月二十六日

——四二、一一、一——

樋口銅牛著

『俳諧新研究』序

近頃は句作にも遠ざかつたが、古俳書になるともとから研究した事がない。銅牛君の様な篤學者があつて、俳諧新研究でも公けにして呉れないと生涯みなし栗の讀み方さへ知らずに濟んで仕舞ふかも知れない所であつた。此瞎漢に向つて序を書けと云はれる銅牛君は、餘程物數奇であるが、それを平氣で書くのは、自分が斯道に造詣があるといふ意味ではない。銅牛君の研究心に感服したからである。

銅牛君は無口な男で、其無口な所が、甚だ銅牛然としてゐるが、其容貌も亦決して銅牛を去る遠き距離とは思へない。先達て一時間程對座して俳談をやつた時につく〴〵と其眼口を眺めて、成程銅牛とはよく付けたものだと思つた。不折君が卷頭に銅牛尊者の像を描くといふ話であるが、定めし銅牛らしい顏が出來る事であらう。

此無口な銅牛君が俳諧新研究を著したと聞いた時には、突然石女舞ひ木人語ると云ふ禪語を憶

ひ出した。是は不言不語の銅牛が忽ち鳴いたからである。

銅の牛の口より野分哉

己酉十月

——四二、一一、二五——

森田草平著

『煤煙』第一卷序

「煤烟」が朝日新聞に出て有名になつてから後間もなくの話であるが、著者は夫を單行本として再び世間に公にする計畫をした。書肆も無論贊成で、既に印刷に回して活字に組み込まうと迄した位である。所が其頃内閣が變つて、著書の檢閲が急に八釜敷くなつたので、書肆は萬一を慮つて、直接に警保局長の意見を確めに行つた。すると警保局長は全然出版に反對の意を仄めかした。もし押切つて發賣に至る迄の手續をしやうものなら、必ず發賣禁止になるものと解釋して、書肆は引下つた。著者は已を得ず「煤烟」の切抜帳を抱いて、大に詰まらなかつてゐた。

所へある氣の利いた男が出て來て、煤烟の全部を出版しやうとすればこそ災を招く恐れがあるので、其中の安全な部分丈を切り離して小冊子に纏めたらどんなものだらうといふ新案を提出した。著者は多少思考を費した上、此說に同意して、直に煤烟の前半、卽ち要吉が鄕里に歸つて東京に出て來る迄の間を取敢ず第一卷として活版にする事に決心した。

著者の選擇した部分は、煤烟の骨子でない所から云へば、著者に取つて遺憾かも知れないが、安全と云ふ點から見れば是程安全な章はない。誰が讀んだつて差支ないんだから大丈夫である。其上余の視る所では、肝心の後編より却て出來が好い樣に思はれる。余は「煤烟」全部を讀み直す暇がないので、判然した判斷を下すに躊躇するが、當時の新聞は連續して缺かさず眼を通したものだから、未だに殘つてゐる其時の印象は、恐らく余に取つて慥かなものだらうと考へる。其印象を平たく他に傳へ得る樣な言葉に引き延ばして見ると斯うである。――「煤烟」の後編はどうもケレンが多くつて不可ない。非常に痛切なことを道樂半分人に見せる爲に書いてゐる樣な氣がする。所が前半には其弊が大分少い。一種の空氣がずつと貫いて陰鬱な色が萬遍なく自然に出てゐる。此意味に於て著者が先づ前編を世に公けにするのは余の贊成する所である。

此前編の特色として、讀者に注意したいのは、事件の充實と云ふ事である。それを少し布衍して云ふと、事件が走馬燈の如くに出てくると云ふ意味である。もう一つ外の言葉で說明すると、事件が發展的に敍せられないで、讀者を壓迫する程びし〳〵と竝んで寄せ掛けるのである。恰も金を接ぎ合せた樣に寸分の隙間なく寄せてくる。從つて讀者は息が繼げない。事件に引き付けられて息が繼げないと云つても嘘ではないが、實を云ふと、寧ろ苦しくて息を繼ぐ餘裕を著書から與へられないのである。此狀態は半ば事件其物の性質から出る事も序に注意したい。煤煙の主人

公が郷里へ歸つてから東京へ引返す迄に遭遇したり回想したりする事件は、決して尋常のものではない。悉く飛び離れて強烈な色采を有してゐるもの許である。要吉は犬の耳を鹽漬にしてゐる女の夢を見たと書いてある。主人公は一場の夢に至る迄、何か天下を驚かす樣な内容でなければ氣がすまないのだとしか解釋出來ない。

夫だから讀者の受ける感じの中には、著者が非常に苦心したなと云ふ自覺が起ると同時に、それが自分の額に反映して讀む事が既に苦しくなる場合もある。又事件があまり派出に丼んでゐるために、(其調子は厭に陰鬱ではあるけれども)殆んどセンセーショナルな安つぽい小說と背中合せをしてゐる樣な氣も起る。

事件が是程充實してゐる割に性格が出てゐないのが不思議である。著者はあれ程性格が書いてあれば澤山ぢやないかと云ふかも知れないが、余の云ふ性格は要吉の特色を指すのである。篇中に書いてあるのは要吉の境遇である。是は濃く出てゐる。けれども其割から云ふと要吉は薄つぽいものである。何故と云へば、要吉の言動が、かゝる境遇の下に置かれたる普通の人のなすべき言動以外には一歩も出てゐないからである。要吉でなくつても、誰を捉へて來ても、斯う云ふ境遇の下に置いたら、矢つ張り要吉の通りに働くだらうと思はれるからである。從つて是は要吉であつて、明吉でも太吉でも半吉でもないといふ特殊の性格を與へてゐない。余は要吉の言動を讀

んで要吉と共に陰鬱にはなるけれど、成程要吉とはこんな種類の人間であると、著者から教へられた事がない。性格を上手にかく人は、これ程烈しい事件の下に主人公を置かないでも、淡々たる尋常の些事のうちに動かすべからざる其人の特色を發揮し得るものである。

以上は余が煤煙の前篇を讀み直して得た感想である。其當否はいざ知らずとして、此書を讀む人の參考に多少なりはしまいかと思つて序文とした。其裏面に追隨する長所に至つては、讀者の一見してすぐ氣の付く事のみだからわざと略した。

明治四十二年十月廿三日

——四三、二、一五——

中村不折畫

『不折俳畫』上序

不折俳畫法には景物が多かつたが今度のには人物が過半を占めてゐる。考へると俳畫の人物程妙に出來上つてるものはない。悉く女に好かれないのを以て特色と心得てる顏ばかりである。グロテスクと云ふ言葉があつて美と區別するが元來此グロテスクなる言葉が西洋語であるに拘はらず其趣味は決して西洋的でない。大抵は日本支那印度の美術品に限つて使はれてる樣に思ふ。夫は何故だか一寸分らないが歐洲の樣な男振りの好い國柄では器量人ばかり眼につくから、變挺な羅漢や仙人の顏付のうちで風雅な奴を撰擇する程の趣味を養成しにくかつたのだらう。幸にして我々は不思議な位とぼけた面相を揃へて生活してゐるので、長い間には何時か此とぼけたうちに一種の趣味を發見すべく餘義なくされた所を西洋人に見付かつて、ついにグロテスクと云ふ名を頂戴して仕舞つたのぢやなからうか。それはどうでも好いが此グロテスクと云ふ趣味を尤も鮮明確的に發揮してゐるものは俳畫である。不折俳畫を一覽すれば誰でも余が說を否定するものはあ

るまい。

此グロテスクと云ふ趣味をカリカチュアから得る面白味と混同しては全く興がない。グロテスクではとぼけた所が眞面目にそれ自身に於て價値を構成してゐるがカリカチュアに至ると本來の面目を誇張して變化せしめた點、卽ち彼我を比較して其間に調和と矛盾を一度に見出すから可笑しいのである。だから俳畫とカリカチュアを一所にするのは茶番と仙人を一つ繩で束ねる樣なもので當を得ない。

俳畫はあらゆる畫のうちで尤も省略法に富んだものである。だから其特長は無理がなく無雜作に省略された所にある。簡易生活を理想とした一部の日本人のうちに俳畫的要素を含んでゐるのは當然である。その日本人の中でもことに簡易生活を喜ぶ坊主俳人の類は無論描寫法にも俳畫的な表現を有せねばならぬと思ふ。こゝが西洋のスケッチとは違ふ所以である。スケッチは本來が大作の用意として他日の材料に書き溜めるものゝ樣に思はれるが、俳畫はさうではない。それ自身に於て完全したものである。是より以上精密にする事も複雜にする事も不必要な所が身上になる。吾々文明人の生活は日にまし繁劇になつて行くのは誰しも氣の付く事であるが斯樣に複雜な文明の潮流に浴して流されてゐるうちに、何だ面倒だもつ〔と〕すつと單簡に願ひたいなと、我知らず遠い昔を回顧する事がある。其時へいと云つてすぐ出てくれるものは俳畫である。余は俳畫

を見る度に單純な昔に歸り得た樣な心持がする。さうして其所に云ふべからざる一種のなつかしみを感ずる。

不折君の技倆に就ては今更喋々するの必要がないからわざと略した。たゞ不折君が苦心の大作を發表する餘暇に斯樣な小品を公け〔に〕せらるゝの勞を多とするのみならず、多趣多樣なる君の趣味の臨機に流露する才力に感謝の意を致さんとする迄である。

四十三年二月

――四三、三、一二――

自然を離れんとする藝術

――『新日本畫譜』の序――

藝術家が自然の一部分を切り拔いて、それを區劃のある特別な枠に嵌め込んで、永久に他の侵入を防いだ時、彼は同時に三樣の興味を感ずる事が出來る。

彼に取つて意味ある此斷片を、廣大な空間中に發見し得たといふ、自家の活眼に對する興味が其一である。此斷片を思ひ切つて大世界から截り取つて、それ自身を完たき小世界に變化させた勇氣に對する興味が其二である。此斷片を自己の頭と腕で思ふ通りに紙もしくは絹の上に拵らえ上げた手柄に對する興味が其三である。

自然は固より藝術家のために存在するものではない。けれども自然のうちに藝術を發見するのは藝術家である。此發見したる藝術に永久の生命を與へんがために、他物の混交を防いで、これを安全の地位に置くものは矢張り藝術家である。最後に、此安全を計る手段として、變り易い自然を依賴せずに、自ら其影とも見るべき第二の自然を創設するのも亦藝術家である。自然を寫す

藝術家が、自然に對して漫りに奴婢の感を抱かずして、常にどこか小さきゴッドの樣な氣宇を有するのはこれが爲である。

吾人の有する自我心の要求は單にこれに止まらない。吾人は誠實に自然を描寫しつゝありと聲言するにも拘はらず、其描寫せる所のものは遂に自家の見たる自然を脱する譯に行かない。自然を寫すと稱しながら常に自然の影を描いてゐる。のみならず少し個性の烈しい人になると、進んでわが腦裏に印象されたる獨特の色彩を發揮しやうと力めてゐる。從つてこの人々の努力は自然を再現しやうとするのではない、わが頭に映じた一種の自然を描かうとする事になる。選擇した自然の特色を出さうとする上に、かねて又自家の特色をも出さうとしてゐる。藝術は是に於て更に一歩自然を去つて人間に近づいてくる。否寧ろ己れに近づいてくる。妙な意味に於て自然から獨立してくる。

もう一段此方面に進むと、吾人は自然をも描かず。自然の映じたるわが頭をも描かず、遂に自然の解釋のみを描くやうになる。解釋とは、われは自然をかく翻譯して眺めると云ふ意味である。歌舞伎の外に能樂が成立し、小說の外にアラビアンナイトが行はれ、普通の畫と竝んで裝飾畫が珍重せられるのは、皆自然を離れて、藝術を藝術とせんとする人間の獨立心に本づくものである。動植物の寫生から出立したと稱せらるゝ幾何模樣の如きは其極端を證明すると云つても差支なか

らうと思ふ。

此獨立心から出た藝術は、一見自然に背く如き感あるに拘はらず、自然を離れんとするの努力あるの點に於て、既に厭味を脫したるものである。自然に背いて不快を感ぜしむる藝術は、自然に背きながら自然を描くと呼號するからである。嘘を演じて眞と思はせやうとする僞を含むからである。日本の芝居の如きは正にそれである。寫實ならざる寫實を見せて、社會の眞相でゞもあるかの如き顏付をなす點に於て、余は芝居を野卑と斷言するを憚らぬ。之に反して能樂は純然普通以外の別天地と思はるゝ程の事を、まともに正直に演じてゐるから毫も强ひられる所がない。もし此藝術のなかに入るのが嫌ならすぐ出て仕舞へば夫迄である。能樂は自然と關係を保つために、ある距離をとつてこれと竝行してゐるかも知れない。けれども其徑路が自然の上を行きつゝあるとは演者も看者も認めてゐない。否あまり寫實過ぎると云つて非難する位である。

日本畫は裝飾的なる點に於て、普通の畫以上に自然を離れて獨立せんとする藝術である。其獨立の程度は無論幾何模樣の如く甚しくはない、或は能樂ほどにも自然を遠ざかつてゐないかも知れない。けれども、誠實な自然の再現でもなければ、自然のわれに映じた頭の記錄でもなくつて、寧ろ一種の自然の解釋である事は明かである。だから全然自然でもなければ、全然不自然でもない。其中間に位するものである。さうして其範圍は應舉の魚の樣な寫生的なものから文人畫のつ

く芋に至るのだから甚だ廣く且つ自由である。

日本畫をかく人のうちに、寫生々々といふ人と、氣韻々々といふ人のあるのは、此廣く且つ自由な範圍の兩極を代表したもので、何方も理由のある主張であると共に、いづれも他を排斥する程に、大切なものではあるまいと思ふ。たゞ寫生を口にする人は自然に重きを置き、氣韻に重きを置く人は人間の頭に重きを置くの差で、兩方ともに面白いものゝ出來るのは無論であらう。

たゞし氣韻派の弊は自然を輕んずると同時に自己の頭をも重んぜず、たゞ氣韻のある作品を遺した人の頭丈を重んずるがため、徒らに粉本のみに拘泥して、草木花鳥悉く同一模型より出るが如き單調に陷る事がある。日本の在來の畫家は實に粉本のみの力で、成功し又失敗したものではなからうか。彼等は實に遲滯なき一筆で、梅の枝もしくは鶴の脛を尤も簡潔に明瞭に確實に安々と誤なく描き出すために、其全力を擧げて練磨の功を積んだ。描く所は早くて、要領を得て、際どくて、多くを語らない裏面に多くを含んでゐる。だからこれを描き始めた人は文與可の竹に於るが如く最も親切に丁寧に自然を觀察したかも知れないが、筆を下すときは、既に第二の自然が頭の中に別に存してゐて、筋肉の力がそれを運び出したに過ぎない。結果は自然に卽いてゐるとも云へるが又自然を離れてゐるとも評せられる。後のこれを學ぶものに至つては、固より自然を

離れてゐる。しかも彼等が親近せんとする人間の頭さへ離れてゐる。要はたゞ筋肉運用の練磨に歸着して仕舞ふ。千篇一律の弊は其所から出るのである。

自然を離れて獨立せんとする傾向の藝術が、この弊に陷つたときは、再び自然に接近して直接に新なる解釋を施すより外に途のないものである。寫生から仕込まれた洋畫家の試みる日本畫が、今の時代に一種特別の意義をもたらすのは是が爲である。余はもと畫に於て造詣のないものである。從つて石井君の新畫譜が果してどれ程この弊を救ふ上に於て價値があるか明瞭に斷言は出來ない。たゞ君が從來の弊竇を擺脫して、再び自然に向つて自己の解釋を試みられた勇氣と精力は余の大いに喜ぶ所である。收むる所七十餘枚のうち一として同樣の構圖がないのでも君の佛を恐れず祖を述べず直に大自然をわが道として親しく研究せられた證據になる。況んや譜中描く所の松の如き、出るごとに葉を異にし枝を異にし幹を異にし、毫も相冒す所なくして、しかも遂に松たるに於てをやである。

たゞ日本畫は石井君自身の斷はられる通り裝飾畫である。裝飾畫の特色は前にも述べる通り自然を離れんとする自我心の要求に應ずる藝術の一樣式である。自然を離れんとする藝術が、一轉して自然に近づくのは、現時の弊がこれをして然らしめたので、永久に互る裝飾畫の必要條件ではない。もし個々の人間が出來る丈自然から獨立して、出來る丈自分の頭に重きを置いた新らし

い解釋を呈出したら、嘸かし面白い事だらうと思ふ。

——四三、九、五——

池邊君の史論に就て

——『明治維新三大政治家』再版序——

去年の秋池邊君の大久保利通論が中央公論に出たとき、余はそれを秋期附錄中の最も興味あるの一篇として、樂しく通讀した。其頃余は痔の病に惱んでゐた。池邊君は又年來坐つてゐた東京朝日新聞主筆の地位を棄てた。彼は半ば余の病床を見舞ふため、半ば彼の地位の變動が余に及ぼし得べき影響について掛念するため、好意上必要上平生よりは屢余の家を訪れた。

さう云ふ會合のある日の出來事であるが、余は池邊君に向つて先達ての大久保論は大變面白かつたと余の實際に感じた通りを告げた。實を云ふと、毎月文學雜誌に出る小說の評判は何處にも載るやうであるが、斯ういふ史論めいたものになると、幾ら面白くても、文壇では丸で度外に置く傾があるのを、余は偏狹としか解釋し得なかつたので、とうに人の口に上つて然るべき彼の史論も、それきり葬られて仕舞ひさうな所に、自然余の同情が起つたから、特に彼に對して直接余の所感を告げたのである。無論嘘は云はなかつた。御世辭も使はなかつた。たゞ大變面白かつた

と告げた丈であつた。さうして余は其場合池邊君に、自分が彼の史論を大變面白く讀んだといふ事實を、自分の口から知らせたかつたのである。

すると池邊君は、さうか夫は好かつたと云つて左も嬉しさうな顏をした。余も腹の中で、褒め榮があつてまあ好かつたと思つたせゐか、何となく愉快を感じた。「何うだらう、文章が少し品が惡くはないだらうか」と池邊君が聞いた。「いや些ともそんな事はない。あれで結構だ。たゞあの三分の二位の所に、長くなるから話を端折るといふやうな文句があるが、あれは僕の樣な讀者から見ると却つて殘念だ。出來る丈細かい點まで端折らずに話して貰ひたかつた」と答へた。さうして池邊君に、あゝ云ふ史傳だか評論だか分らない、一種の事實譚兼批評といつたやうなものを續けて書いて、あとから夫を一冊なり二冊なり重味のある書物に纏めたら可からうと勸めた。池邊君も多少乘氣らしく、漸く閑散な身になつたから、一つ試みて見やう。あの調子では本を作る事も夫程困難ではないやうだからと云つて別れた。

夫から半年も經たないうちに池邊君は突然死んで仕舞つたので、余の希望は、單に岩倉、大久保、伊藤の三政治家に於て實現された丈に過ぎなかつた。しかし其三篇を重ねると優に一卷の頁を埋めるに充分な程あるので、當時池邊君の話を筆記した瀧田君が來て、余に序文樣のものを書けといふ注文を出した。夫は此三月頃の事と覺えてゐる、其時余は「彼岸過迄」といふ小說を每

日一回づゝ「朝日」に載せてゐた。それで、もし序文を書くとすれば、書肆の要求によつて、間に合はせのもの、——と云ふより、自分に餘裕のない間に合せの心で筆を執らなければならなかつた。それが池邊君の朋友としての余には如何にも苛(つら)かつた。苟しくも書く以上は、亡友のために書くのだといふ純粹な心を有つて書きたい。其心が萌さないのに、たゞ賴まれたから書きさへすれば義務は濟むといふ當座逃れの考で原稿紙に向ふのは、どう思ひ直しても故人に對して申し譯がないやうな心持がした。折角の依賴も斯ういふ譯で遺憾ながら一度はとう〳〵斷つた。

所が幸にして史論の初版を賣り盡して二版を出す日が來た。幸にして又「彼岸過迄」を書き上げた余は、君のために二版の序を草する餘裕を得た。そこで筆を執つて右の次第を綴つて行くうちに自然生前の池邊君を思ひ出す事も多くなつた。

余が朝日新聞に入社の際、仲に立つものが漸次往復の勞を重ねた末、ほゞ相談が纏まりかけた機を見て、池邊君は先を越して向ふから余の家を訪問した。其時余は本鄕の西片町に住んでゐた。余は其二階に彼を案內した。固より借家の事であるから致し方もないが、余の家は頗る蚊細く不安心に出來上つてゐた。余の如き卑力なものが疊を踏んでも、二階はずしん〳〵と音がした。池邊君の名は其前から承知して知つてゐたが、顏を見るのは其時が始めてなので、何んな風采の何んな恰好の人か丸で心得なかつたが、出て面接して見ると大變に偉大な男であつた。顏も大きい、

手も大きい、肩も大きい。凡て大きいづくめであつた。余は彼の體格と、彼の坐つてゐる客間のきやしや一方の骨組とを比較して、少し誇張の嫌はあるが、大佛を待合に招じたと同樣に不釣合な感を起した。先づ是からしてが少し意表であつた。夫から話をした。話をしてゐるうちに、何ういふ譯だか、余は自分の前にゐる彼と西鄕隆盛とを連想し始めた。さうして其連想は彼が歸つた後迄も殘つてゐた。勿論西鄕隆盛に就て余は何の知る所もなかつた。だから西鄕から推して池邊を髣髴する譯はないので、寧ろ池邊から推して西鄕を想像したのである。西鄕といふ人も大方こんな男だつたのだらうと思つたのである。此感じは決していたづら半分のものではなかつた。其證據には、彼が歸つた後で、余はすぐ中間に立つて余を「朝日」へ周旋する者に手紙を出した。其文句は固より今覺えてゐる筈がないが、意味をいふと、是迄話が着々進行して略纏まる段になつたにはなつたが、何だか不安心な所が何處かに殘つてゐた。然るに今日始めて池邊に會つたら其不安心が全く消えた。西鄕隆盛に會つたやうな心持がする。――ざつと斯んなものであつた。池邊君が余の事を始終念頭に置いて、余の地位のために進退を賭する覺悟でゐたといふ話はつい此間池邊君と關係の深いある人の口を通して余に傳へられたから、初對面の時彼の人格に就いて余の胸に映じた此畫像は全くの幻影ではなかつたのである。

然し西鄕隆盛は別問題である。夫程詩的な連想を逞ふする余は寧ろ突飛だと云つて他から笑は

れるかも知れない。事實である以上固より笑はれて構はない積で書いたには相違ないが、それを當面の問題たる彼の史論と結び付けて考へると、書いた方が余には大變興味が深いから書いたのである。

彼の史論（とくに大久保論）を讀んで、何より先に氣のつくのは、敍述が維新の當時から征韓論の騷ぎに至るまでの、日本の歷史中極めて際どい時期に起つた複雜な政治關係であるから、明治の世に生れたものなら、誰の注意でも牽き得なければならない大切な斷面に相違ないといふ考に依傍して起る、現在過去の問題である。吾々の運命を直接に支配してゐる王政復古以後明治初年頃の政界は、吾々の脈搏と一氣に連絡した緣の深いものではあるが、誰がどう研究しても過去の事柄であるには極つてゐる。如何に觀察しても回顧しなければ見る事も聞く事も出來ないのである。所が池邊君の話を讀むと、其過去が逆さに流れて現在に彷徨して來る。長州、薩州、勤王、佐幕、あらゆる複雜な光景が記憶の舞臺を賑やかにする代りに、美事なパノラマとなつて、現に眼の前に活きたまゝ展開する。從つて話をする池邊君は決して過去を振り向いてゐない。正に維新前後の騷動の狂瀾の中にあつて、自由自在に立ち働らいてゐる。反故や書き付の中から死んだ歷史の亡骸を掘り出す學者的態度を取らないで、正に元勳の一人として、はら〳〵しながら、前後左右の事情を偵察したり、批評したりしてゐる。遠くから眼鏡越に過去を眺めないで、立派な

志士として、自分自身死生の衢に出入してゐる觀がある。池邊君は恐らくさういふ風に生れた男なのだらう。さう思ふと、池邊君と西郷隆盛を連想した事が他人にはどうでも、余には愈面白くなつてくる。

池邊君は大久保や岩倉についで西郷隆盛の評をやる筈であつたが、つい夫を實行する機會が來ないうちに死んで仕舞つたのださうである。甚だ殘念な事をしたと讀者は思ふだらう。余も同感者の一人である。然し若し余の幻覺を極端に引き延ばす事を許すならば、余は池邊君と西郷を一人と見做して、其西郷の池邊から大久保や岩倉の批評を聞いてゐる心持でゐたいのだから、或は西郷論の出來なかつた方が、偶然ながら詩的には余にとつて面白いかも知れない。

池邊君は、西南戰爭の時に有名であつた池邊吉十郎の子である。其時代にはたゞ十三四の少年であつたから助かつたのだらうが、もう少し年を取つてゐたら屹度軍に出て討死をしたに違ない。池邊君は討死をしに生れて來たやうな男らしかつた。さうでなくつても、今二十年早く生れたなら、必ず維新當時の渦中に飛び込んで、國家の爲に働らいたに違ない。余が彼に痔を切開した後の苦痛を訴へて、斯う臆病で氣が弱くつては、幕末に生れる事は到底も出來ないと云つて笑つた時、彼はさうだ吾々もあの頃生れてゐたら多分は殺されてゐるだらうなと語つた事がある。

池邊君と余とは比較的新らしい交際である。然し新らしい割には親しい交際であつた。去年の

秋社に或る事件が起つて、それに關連した用向のため、互に話したり話されたりする必要と機會とが與へられてから、余は大分深く彼の心の中に立ち入ることが出來た。彼も亦余の性格のある方面を漸く呑み込んだらうと思ふ。もし池邊君が長く生きてゐたら、或は莫逆の交りが二人の間に成立し得たかも知れなかつた。不幸にして其交りが熟し切らないうちに彼は死んだ。死んだけれども、余は未だに彼の朋友として存在するのである。其朋友の資格で、彼の遺稿の卷頭に、此一篇を掲げ得るのは余の喜びであり、又余の誇りである。

明治四十四年五月

――四五、五、一八――

『土』に就て

――長塚節著『土』序――

「土」が「東京朝日」に連載されたのは一昨年の事である。さうして其責任者は余であつた。所が不幸にも余は「土」の完結を見ないうちに病氣に罹つて、新聞を手にする自由を失つたぎり、又「土」の作者を思ひ出す機會を有たなかつた。

當初五六十回の豫定であつた「土」は、同時に意外の長篇として發達してゐた。途中で話の緒口を忘れた余は、再びそれを取り上げて、矢鱈な區切から改めて讀み出す勇氣を鼓舞しにくかつたので、つい夫限に打ち遣つたやうなものゝ、腹のなかでは私かに作者の根氣と精力に驚ろいてゐた。「土」は何でも百五六十回に至つて漸く結末に達したのである。

冷淡な世間と多忙な余は其後久しく「土」の事を忘れてゐた。所がある時此間亡くなつた池邊君に會つて偶然話頭が小説に及んだ折、池邊君は何故「土」は出版にならないのだらうと云つて、大分長塚君の作を褒めてゐた。池邊君は其當時「朝日」の主筆だつたので「土」は始から仕舞迄

眼を通したのである。其上池邊君は自分で文學を知らないと云ひながら、其實摯實な批評眼をもつて「土」を根氣よく讀み通したのである。余は出版界の不景氣のために「土」の單行本が出る時機がまだ來ないのだらうと答へて置いた。其時心のうちでは、隨分「土」に比べると詰らないものも公けにされる今日だから、出來るなら何時か書物に纏めて置いたら作者の爲に好からうと思つたが、不親切な余は其日が過ぎると、又「土」の事を丸で忘れて仕舞つた。

すると此春になつて長塚君が突然尋ねて來て、漸く本屋が「土」を引受ける事になつたから、序を書いて呉れまいかといふ依頼である。余は其時自分の小説を毎日一回づゝ書いてゐたので、「土」を讀み返す暇がなかつた。已を得ず自分の仕事が濟む迄待つてくれと答へた。すると長塚君は池邊君の序も欲しいから序でに紹介して貰ひたいと云ふので、余はすぐ承知した。余の名刺を持つて「土」の作者が池邊君の玄關に立つたのは、池邊君の母堂が死んで丁度三十五日に相當する日とかで、長塚君はたゞ立ちながら用事丈を頼んで歸つたさうであるが、それから三日して肝心の池邊君も突然亡くなつて仕舞つたから、同君の序はとう〳〵手に入らなかつたのである。

余は「彼岸過迄」を片付けるや否や前約を踏んで「土」の校正刷を讀み出した。思つたよりも長篇なので、前後半日と中一日を丸潰しにして漸く業を卒へて考へて見ると、中々骨の折れた作物である。余は元來が安價な人間であるから、大抵の人のものを見ると、すぐ感心したがる癖が

あるが、此「土」に於ても全くさうであつた。先づ何よりも先に、是は到底余に書けるものでないと思つた。次に今の文壇で長塚君を除いたら誰が書けるだらうと物色して見た。すると矢張誰にも書けさうにないといふ結論に達した。

尤も誰にも書けないと云ふのは、文を遣る技倆の點や、人間を活躍させる天賦の力を指すのではない。もし夫れ丈の意味で誰も長塚君に及ばないといふなら、一方では他の作家を侮辱した言葉にもなり、又一方では長塚君を擔ぎ過ぎる策略とも取れて、何方にしても作者の迷惑になる計である。余の誰も及ばないといふのは、作物中に書いてある事件なり天然なりが、まだ長塚君以外の人の研究に上つてゐないといふ意味なのである。

「土」の中に出て來る人物は、最も貧しい百姓である。教育もなければ品格もなければ、たゞ土の上に生み付けられて、土と共に生長した蛆同様に憐れな百姓の生活である。先祖以來茨城の結城郡に居を移した地方の豪族として、多數の小作人を使用する長塚君は、彼等の獸類に近き、恐るべく困憊を極めた生活狀態を、一から十迄誠實に此「土」の中に收め盡したのである。彼等の下卑で、淺薄で、迷信が強くて、無邪氣で、狡猾で、無欲で、強欲で、殆んど余等（今の文壇の作家を悉く含む）の想像にさへ上りがたい所を、あり〳〵と眼に映るやうに描寫したのが「土」である。さうして「土」は長塚君以外に何人も手を着けられ得ない、苦しい百姓生活の、最も獸

類に接近した部分を、精細に直敍したものであるから、誰も及ばないと云ふのである。

人事を離れた天然に就いても、前同樣の批評を如何な讀者も容易に肯はなければ濟まぬ程、作者は鬼怒川沿岸の景色や、空や、春や、秋や、雪や風を綿密に研究してゐる。畠のもの、畔に立つ榛の木、蛙の聲、鳥の音、苟くも彼の鄕土に存在する自然なら、一點一畫の微に至る迄悉く其地方の特色を具へて敍述の筆に上つてゐる。だから何處に何う出て來ても必ず獨特（ユニーク）である。其獨特（ユニーク）な點を、普通の作家の手に成つた自然の描寫の平凡なのに比べて、余は誰も及ばないといふのである。余は彼の獨特（ユニーク）なのに敬服しながら、そのあまりに精細過ぎて、話の筋を往々にして殺して仕舞ふ失敗を歎じた位、彼は精緻な自然の觀察者である。

作としての「土」は、寧ろ苦しい讀みものである。決して面白いから讀めとは云ひ惡い。第一に作中の人物の使ふ言葉が余等には餘り緣の遠い方言から成り立つてゐる。第二に結構が大きい割に、年代が前後數年にわたる割に、周圍に平たく發達（アクセレレーション）したがる話が、筋をくつきりと描いて深くなりつゝ前へ進んで行かない。だから全體として讀者に加速度（アクセレレーション）の興味を與へない。だから事件が錯綜纏綿して縺れながら讀者をぐい〳〵引込んで行くよりも、其地方の年中行事を忘りなく丹念に平敍して行くうちに、作者の拵らへた人物が斷續的に活躍すると云つた方が適當になつて來る。其所に聊か人を魅する牽引力を失ふ恐が潜んでゐるといふ意味でも讀みづらい。然し是等

は單に皮相の意味に於て讀みづらいので、余の所謂讀みづらいといふ本意は、篇中の人物の心なり行なりが、たゞ壓迫と不安と苦痛を讀者に與へる丈で、毫も神の作つてくれた幸福な人間であるといふ刺戟と安慰を與へ得ないからである。悲劇は恐しいに違ない。けれども普通の悲劇のうちには悲しい以外に何かの償ひがあるので、讀者は涙の犧牲を喜こぶのである。が、「土」に至つては涙さへ出されない苦しさである。雨の降らない代りに生涯照りつこない天氣と同じ苦痛である。たゞ土の下へ心が沈む丈で、人情から云つても道義心から云つても、殆んど此壓迫の賠償として何物も與へられてゐない。たゞ土を掘り下げて暗い中へ落ちて行く丈である。

「土」を讀むものは、屹度自分も泥の中を引き摺られるやうな氣がするだらう。余もさう云ふ感じがした。或者は何故長塚君はこんな讀みづらいものを書いたのだと疑がふかも知れない。そんな人に對して余はたゞ一言、斯樣な生活をして居る人間が、我々と同時代に、しかも帝都を去る程遠からぬ田舍に住んで居るといふ悲慘な事實を、ひしと一度は胸の底に抱き締めて見たら、公等の是から先の人生觀の上に、又公等の日常の行動の上に、何かの參考として利益を與へはしまいかと聞きたい。余はとくに歡樂に憧憬する若い男や若い女が、讀み苦しいのを我慢して、此「土」を讀む勇氣を鼓舞する事を希望するのである。余の娘が年頃になつて、音樂會がどうだの、帝國座がどうだのと云ひ募る時分になつたら、余は是非此「土」を讀ましたいと思つて居る。娘

は屹度厭だといふに違ない。より多くの興味を感ずる戀愛小說と取り換へて呉れといふに違ない。けれども余は其時娘に向つて、面白いから讀めといふのではない。苦しいから讀めといふのだと告げたいと思つて居る。參考の爲だから、世間を知る爲だから、知つて己れの人格の上に暗い恐ろしい影を反射させる爲だから我慢して讀めと忠告したいと思つて居る。何も考へずに暖かく生長した若い女（男でも同じである）の起す菩提心や宗敎心は、皆此暗い影の奥から射して來るのだと余は固く信じて居るからである。

長塚君の書き方は何處迄も沈着である。其人物は皆有の儘である。話の筋は全く自然である。余が「土」を「朝日」に載せ始めた時、北の方のSといふ人がわざ〳〵書を余のもとに寄せて、長塚君が旅行して彼と面會した折の議論を報じた事がある。長塚君は余の「朝日」に書いた「滿韓ところ〴〵」といふものをSの所で一回讀んで、漱石といふ男は人を馬鹿にして居るといつて大いに憤慨したさうである。漱石に限らず一體「朝日新聞」の記者の書き振りは皆人を馬鹿にして居ると云つて罵つたさうである。成程眞面目に老成した、殆んど嚴肅といふ文字を以て形容して然るべき「土」を書いた、長塚君としては尤もの事である。「滿韓ところ〴〵」抔が君の氣色を害したのは左もあるべきだと思ふ。然し君から輕佻の疑を受けた余にも、眞面目な「土」を讀む眼はあるのである。だから此序を書くのである。長塚君はたま〳〵「滿韓ところ〴〵」の一回

を見て余の浮薄を憤つたのだらうが、同じ余の手になつた外のものに偶然眼を觸れたら、或は反對の感を起すかも知れない。もし余が徹頭徹尾「滿韓ところ〴〵」のうちで、長塚君の氣に入らない一回を以て終始するならば、到底長塚君の「土」の爲に是程言辭を費やす事は出來ない理窟だからである。

長塚君は不幸にして喉頭結核にかゝつて、此間迄東京で入院生活をして居たが、今は養生旁旅行の途にある。先達てかねて紹介して置いた福岡大學の久保博士からの來書に、長塚君が診察を依頼に見えたとあるから、今頃は九州に居るだらう。余は出版の時機に後れないで、病中の君の爲に、「土」に就いて是丈の事を云ひ得たのを喜こぶのである。余がかつて「土」を「朝日」に載せ出した時、ある文士が、我々は「土」などを讀む義務はないと云つたと、わざ〳〵余に報知して來たものがあつた。此時余は此文士は何の爲に罪もない「土」の作家を侮辱するのだらうと思つて苦々しい不愉快を感じた。理窟から云つて、讀まねばならない義務のある小說といふものは、其小說の校正者か、內務省の檢閱官以外にさうあらう筈がない。わざ〳〵斷わらんでも厭なら厭で默つて讀まずに居れば夫迄である。もし又名の知れない人の書いたものだから讀む義務はないと云ふなら、其人は只名前丈で小說を讀む、內容などには頓着しない、門外漢と一般である。文士ならば同業の人に對して、たとひ無名氏にせよ、今少しの同情と尊敬があつて然るべきだと思

ふ。余は「土」の作者が病氣だから、此場合には猶ほ更らさう云ひたいのである。

明治四十五年五月

――四五、五、一五――

秋元梧樓編『三愚集』序

句は一茶畫は芋錢書は漱石それ故に三愚集といふ句を作りて後世に殘せる一茶は氣の知れぬ男なり其句を畫にする芋錢は入らざる男也賴まれて不得止一茶の句を寫せる漱石は三人のうちにて一番の大馬鹿なり三愚を一堂に會して得意なる秋元梧樓に至つては賢か愚か殆んど判しかたし

四十五年五月

――大正九、七、二八――

高原蟹堂著『極北日本』序

余は東京の場末に生れたものであるが、妙な關係から久しい以前に籍を北海道に移したぎり、今に至つて依然として後志國の平民になつてゐる。原籍のある所を知らないのも變だと思つて、機會があつたら一度海を超えて北の方へ渡つて見たい積でゐたが、つい積計で實行の決心は容易に出來ず、來る年來る年を荏苒と暮らして仕舞つた。二三年前ある知人が、あちらへ行くから一所に行かぬかとわざ〳〵勸めて呉れたが、其時も都合が惡くて矢張り懣圖々々東京に殘つてゐた。

戸籍面からいふと故郷ともいふべき北海道ですら斯の通りだから、其先の樺太へ旅行などは固より思ひも寄らぬ事で、樺太と云へば嘸寒いだらうと想像する位がせきの山であつた。所が去年の夏我社の講演會があつたとき蟹堂君と同じ組になつて、堺と大阪と二ヶ所で、君の樺太談を二席聞いてから樺太が大いに面白くなつた。「極北日本」には此二席で述べ足りない所が悉く布衍してあるのだから、余から云へば、其面白さが又遺憾なく布衍された譯になる。

樺太の記事中腦肭臍の敍述は、此動物の生活狀態に暗き余を、大いに驚ろかしたものである。然し君の筆に上つた長官や第一部長の名も亦官吏の動靜に無頓着な余を少なからず刺激した。蟹堂君が親しく大經營の方針を聽いたといふ平岡長官や、それから君が世話になつたといふ中川第一部長は、二人共豫備門時代に於ける余の同窓である。平岡君とは夫程親しくはなかつたが、中川君とは別懇の間柄であつた。たしか學校を卒業した時の話だと記憶してゐるが、知り合の某々等がある序で顏を合はした折、座上を見廻して此うちで誰が一番先に馬車に乘るだらうといつたものは此中川君であつた。誰も答へない先に、まあ己だらうなと云つたものも此中川君であつた。其時居合はした五六の卒業生のうちで出入に馬車を驅つてゐるものが今あるかないか、まだ調べて見ない余の知らう筈もないが、少なくとも中川君丈は、慥かに橇に乘つて樺太を横行してゐるに違ない。その時の一人であつた某理學士も近々樺太へ轉任するといふから、これも中川君と前後して橇に乘る事だらう。

蟹堂君の筆は縱横に自在である。だから何でも構はず筆に任せて洒落のめし過ぎるのが、憾むらくは君の文章の煩になりはせぬかと危ぶまざるを得ない。けれども「極北日本」は高級な藝術的作物の積で書いたのでない事は、讀者も承知して置く必要がある。蟹堂君は新聞の讀ものとして、其日々々をただ我々に面白く讀ませるため、成るべく內容の平板單調を補ふ工夫に出たので

ある。だから蟹堂君の書き方は、單に文學的といふ方面から見れば短所もあらうが、新聞の續き物といふ刺戟を一位に置かなければならない條件つきの文章を本義として見ると、中々に成功した才筆に相違ないのである。

大正元年十月

――大正元、一二、一――

『社會と自分』自序

此集に收めた講演六篇のうち、初めの四種は去年八月中大阪朝日講演會のために拵らへたものである。頁數の都合で、其後に付け足した二種は、餘程以前に、ある特別の席上で述べたもので、舊稿として書架の隅にあつたのを、今度一所に纏めたのである。是等の舊稿は雙方とも、もつと現在の自分の意に充つるやうに書き直したいのだけれど、其暇がないので已むを得ず元の儘にして置いた。ことに「文藝の哲學的基礎」は、隨分六づかしい大問題を左も容易さうに、從つてある意味から見て、幾分か輕佻に、講じ去つた趣があるので、自分は甚だ遺憾に思つて居る。「創作家の態度」でも、今日の文壇と關聯して、もう少し剴切に讀者の頭に響くやうに書き改めたいのだけれども、前同樣の譯で仕方がない。

此講演集の名を講演集としないで、「社會と自分」としたのは、何れの講演も其主意を抽象して引き括れば、要するに皆社會對自分の關係を研究したものに過ぎないからである。

大正元年十二月

——大正二、二、五——

ふぢ子作『相模の埃』紹介

「相模のほこり」といふものを私の手迄送つて來ましたから一寸御目にかけます。此短篇は小説としては物足らないものでありますが、寫生文としては堅固なものと思ひます。斯ういふ文體と材料で長い小説が書いて行かれるなら結構だと思ひます。兼てからあなたの御主張通りのものが出來はしませんか。私はさういふ意味で昔からホトトギスの投書を尊敬して拜見して居ります。だから此一篇も右投書の中にお加へを願つて、私と同感のものゝ眼に觸れさせたいといふ考を起しました。御採用下さい。いづれ其内匆々。

六月十日

虚子様

坐下

金之助

――大正二、七、一三『ホトトギス』――

野上八重子譯『傳説の時代』序

私はあなたが家事の暇を偸んで『傳説の時代』をとう〳〵仕舞迄譯し上げた忍耐と努力に少からず感服して居ります。書物になつて出ると餘程の頁數になるさうですが嘸骨の折れた事でせう。原書は私の手元にもあるから承知してゐますが、一寸見ると四六版の小形の冊子に過ぎませんけれども、活字は細かし、上下は詰つてゐるし、讀むのにさへ隨分の時間は懸ります。況して一行毎に譯して行くとなつたら、それを專業にする男の手でもさう容易くは出來ません。況して夫の世話をしたり子供の面倒を見たり弟の出入に氣を配つたりする間に遣る家庭的な婦人の仕業としては全くの重荷に相違ありません。あなたは前後八ケ月の日子を費やして思ひ立つた翻譯を成就したと云つて寧ろ其長きに驚ろかれるやうだが、私は却つて其迅速なのに感服したいのです。

出版に就て私の序文が御入用だとの仰は謹んで承りましたが、私はあらゆるミスに就て何事もいふ權利を有たない無學者なのだから少からず困却します。私は希臘の神話に就いて、あそこを

少し、こゝを少し、と云つた風にうろ覺えに覺えてはゐますが、系統的には研究もせず、批判もせず、漫然と今日迄經過して來た事を、今日あなたの前に自白しなければならなくなりました。あなたの御譯しになつた原書は、今でもちやんと私の書架の中に飾つてあります。それを買つたのは何時の頃の事か覺えてゐない位ですから定めし古い昔だらうと思ひます。けれども其昔に買つた本を、今日迄まだ一度も眼を通した記憶がないのも慥かな事實ですから、私は希臘の神話にかけては、あなたよりも遙かに無知識なのです。立派な序文の書けやう筈がありません。

御存じの通り私は英文學出身のものですから、高等學校在學の頃から歐洲文學の根柢に横はる二つの寶庫（聖書と希臘神話）をいつか機會を見て思ふまゝ熟覽して置きたいといふ希望を抱いてゐましたが、御恥づかしい事に、此機會は永久に多忙な自分の眼前に遂に出現せずに濟んで仕舞ひました。

私が高等學校にゐる頃同級生に松本亦太郎（今の文學博士）といふ人がゐました。此人は其頃熱心な基督信者でしたが、ある時私に、聖書を日に何頁づゝとか讀むと、丁度三年目に新舊兩約全書を通讀する事になるといつて、それを日課として毎日怠らず繰返してゐるやうでした。私は其話を聞いた時、たとひ私が耶蘇教徒でないにせよ、バイブルは文學上必要の書物だから、さういふ課程をこしらへて、長い間に通讀したら嘸有益だらうと思つて、既に遣り始めようと迄決心

した事があります。然し好きな事にばかり夢中になり易い、又脈な事に始終追ひ懸けられてゐた其頃の私には、ついに夫すら果さずじまひに終りました。夫だから、私のバイブルに於ける知識は非常に貧弱なものです。さうして私の希臘神話に於る知識も亦これに劣らぬ程憐なものなのに過ぎません。

それがため學校を出て教師をしてゐる時分には、よく雙方の故事故典で惱まされました。仕方なしにバイブルのコンコーダンスを左右に置いたりクラシカル字彙といふやうなものを机上に具へたりして、何うか斯うか御茶を濁して通りました。甚だ切ない事でした。切ない許ならまだしも、時によると、馬鹿々々しくて腹の立つ事さへありました。

あなたが何んな動機から神話を譯して御覽になつたかはまだ解らないが、恐らく文學を研究する人の手引草として許ではないでせう。今の人の手にする文學書にはギーナスとかバツカスとかいふ呑氣な名前は餘り出て來ないやうです。希臘のミソロジーを知らなくても、イブセンを讀むには殆んど差支ないでせう。もつと皮肉にいふと、人生に切實な文學には遠い昔しの故事や故典は何うでも構はないといふ所に詰りは落ちて來さうです。あなたもそれは御承知でせう。それでゐてこんな夢のやうなものを八ケ月もかゝつて譯したのは、恐らく餘りに切實な人生に堪へられないで、古い昔の、有つたやうな又無いやうな物語に、疲れ過ぎた現代的の心を遊ばせる積りで

はなかつたでせうか、もし左右ならば私も全く御同感です。其意味を面倒に述べ立てるのは大袈裟だから止しますが、私は自分で小説を書くと其あとが心持ちが悪い。それで呑氣な支那の詩などを讀んで埋め合せを付けてゐます。夫から大病中徒然を慰めるため繪（繪といふ名はちと分に過ぎるから、繪のやうなものと云つた方が適切ですが）其繪を描いて遊んでゐると、矢張り仙人だの坊主だの山水だのが天然自然題目になります。是もある意味に於てあなたの神話に丹精を盡したと同じ動機になるのではありますまいか。弱い神經衰弱症の人間が無暗に他の心を忖度して好い加減な事を申して濟みません。もし間違つたら御勘辨を願ひます。

最後に神様の名前の發音に就いて一寸申上げます。あなたの發音法は大部分大陸讀方（コンテネンタル・メソツド）を用ゐられた様ですが、日本で云ひ慣らされたバツカスとかヰーナスとか云ふのは英吉利讀にされたと見えますから其邊は一寸讀者に注意して置いて遣らないと惡いだらうと思ひます。夫から又羅甸讀にしてもクオンチチイを付けて發音しないで、のべつに羅馬字綴りの讀み方見たやうに遣つたのがあるなら、夫も序に斷つて置いて御遣んなさい。

序を書きたいのは山々ですが序らしい序が書けないので此手紙を書きました。若し序の代りにでも御用ひが出來るなら何うぞ御使ひ下さいまし。以上。

六月十日

野上八重子様

夏目金之助

――大正二、七、一五――

想田秋曉編『高岳』題言

鄉土藝術といふものは單に言葉の上の戯れのように思はれます、若し鄉土藝術といふものが存在するなら、それは其鄉土以外の人にも讀まれ得る性質のものでなくてはならないでせう。其鄉土以外のものにも讀まれ得るなら、それで其鄉土以外にも存在の價があるでせう。此價値ある作品の集輯を望みます。

――大正三、一、三――

米窪太刀雄著『海のロマンス』序

あなたの同航日記は海を知らない人に取つて興味の深いものであります。又有益なものであります。私は『海のロマンス』と云ふ標題の下に此同航日記が公けにされるのを喜んで居ります。概していふと文筆は陸の仕事です。陸に居て海を書くコンラッドの様な人はありますが船に居て海の生活を其日々々に寫して行つた人はあまりないと思ひます。それも暇のある人が道樂にならやれるかも知れませんが、あなたの様に練習に忙がしい身で、朝夕仕事に追懸けられながら、疲れた手にペンを持つ事を毎日忘れずに何百日も遣り通すといふ事は到底出來る業ではありますまい。此點に於てあなたの文章は外の人のそれよりも遙かに骨の折れた努力を示して居ます。此點に於て確かに世間に紹介される價値があると思ひます。

あなたは普通の人に出來ない事を爲すつたのです。御蔭で普通の人に知れない事を公けにする機會を得たのです。今度の帆走は約四百日で三萬六千浬を走つたのださうですが、此未曾有の同

航中に含まれて居る暴雨だの海化だの、波の山だの、雲の鬼だの、陸では百年經つても見る事の出來ないものが、たゞあなたの忍耐で握られたペンの先からのみ湧いて出たとすれば、あなたも嬉しいでせう。陸に居るものも嬉しいのです。島國と名は付いて居ても海の生活を知らない日本人はいくらでも居ます。知らないで知りたがつて居る人も澤山あります。あなたは斯ういふ人にケープタウンや、リオ、デ、ジヤネイロや、フリーマントルから、好い土産を携へて歸つて來たと云はなければなりません。

あなたの文章は才筆です。少しの淀みもなく、それからそれと縱横にペンを驅使して行く御手際は殆んど素人らしくありません。よくあの忙がしい練習船のうちで、此位に念入りの文章が書けるかと思ふと感服せずには居られません。然しそこにあなたの弱點の潜んでゐる事を忘れてはなりません。あなたの筆は達者過ぎます。あなたは才に任せて書き過ぎました。素人らしくないと同時に少し黑人臭くなりました。私はあなたの文を讀んで何故延ばす一方にのみ走らないで、縮める工夫に少し頭を使はなかつたかを遺憾に思ふのです。あなたの文章は私が昔し書いたものの系統を何處かに引いて居ます。それが私には猶更辛いのです。人の文章が自分の文章の惡い所に似てゐる。私に取つて是程面目のない事はありません。私は「猫」を書いて何遍か後悔しました。さうして其後悔の過半は「猫」らしい文を讀んだ時に起つたのです。あなたが私の文章を眞

似たと云つては失禮です。然し私の文章の惡い所があなたの文章にもあると云ふ事は疑もない事實です。私は其後自分の非を改めた積りです。あなたも今度第二の『海のロマンス』を書く時には何うぞ私の忠告を利用して、素人離れのした、しかも黑人染みない管筆で純粹なものを書いて下さい。

大正二年十二月二十日

太刀雄様

夏目漱石

――大正三、二、一〇――

保坂歸一著『吾輩の見たる亞米利加』下篇序

あなたの著書の上卷がまだ出版にならない頃、私はある本屋から訪問を受けた事があります。其本屋はあなたの原稿をあなたの著書と銘を打たずに世の中へ公けにしやうといふ考らしかつたのですけれども、それを私に無斷で遣る程の勇氣もなかつたものと見えて、わざ〳〵私の意向を確めに來たのでした。其時私は無論不贊成だと云ひ放ちました。と云ふのは、現にあなたといふ立派な著者があるのにも拘はらず、故さらに夫を隱して、世間へは私が『猫』のつゞきでも書いたやうに見せかけやうとする底意が本屋にあつたからです。書物の中味が佳ければ著者に氣の毒だし、惡ければ私の名前に關係すると私は云ひました。中味の善惡は別としても胡魔化しだから不可ないと忠告して遣りました。若し夫を敢てするならば筆を執る兩人の迷惑のみならず、書肆として君の家の信用を害する事になるとも云ひ添へました。さうしたら本屋は御尤もだと云つて歸りました。それから少時して又其男に會つた時、あの原稿は何うしたと聞いたら、見合せましたと答へました。

私は其原稿が別の出版者の手に渡つて、保坂歸一著として立派に公けにされたのを喜ぶのであります。さうしてあなたが私の『猫』を亞米利加迄連れて行つて下さつた御厚意に對して感謝の意を表したいと思ふのであります。私の『猫』はたしか麥酒を飲んで水甕の中へ落ちてそれぎり成佛したと記憶してゐます。其猫は大正になつてから又あなたの手で生き返つた樣なものです。

私は十年振に故國へ歸られたあなたの貴重な時間を割いて、三度迄早稻田の片田舍を尋ねて下さつたあなたの御親切をありがたく思ひます。わが同胞が亞米利加でつくつた果物だと云つて惠まれた御土產を快よく頂きます。

再度の御航海ももう二週間のうちのやうに伺ひます。あなたの將來の健康と成功とを祈ります。

三月十八日

保坂歸一樣

夏目金之助

——大正三、四、一〇——

岡本一平著　竝畫

『探訪畫趣』序

私は朝日新聞に出るあなたの描いた漫畫に多大な興味を有つてゐる一人であります。いつか社の鎌田君に其話をして、あれなりにして捨てゝしまふのは惜しいものだ、今のうちに纏めて出版したら可からうにと云つた事があります。其後あなた自身が見えた時、私はあなたに自分の描いたものはみんな保存してあるでせうねと聞いたら、あなたは大抵散逸してしまつたやうに答へられたので私は驚ろきました。尤もさういふ私も隨分無頓着な方で、俳句などになると、作れば作つたなりで、手帳にも何にも書き留めて置かないために、一寸短冊などを突きつけられて、忘れたものを思ひ出すのに骨の折れる場合もありますが、それは私がその道に重きを置いてゐない結果だから、仕方がありませんが、貴方の畫は私の俳句よりも大事にして然るべきだと私はかねてから思つてゐたのだから、それを揃へて置かない貴方の料簡が私には解らなかつたのです。

あなたは私に云はれて始めて氣が付いたやうに工場の中を探し廻つたといふぢやありませんか。

さうして漸くそれを出版する丈に纏めたのださうですね。左右なればあなたの勞力が單獨に世間に紹介されるといふ點に於て、あなたも滿足でせう、最初勸誘した責任のある私も喜ばしく思ひます。私ばかりではありません、世の中には私と同感のものがまだ澤山あるに違ないのです。

普通漫畫といふものには二た通りあるやうです。一つは世間の事相に頓着しない藝術家自身の趣味なり嗜好なりを表現するもので、一つは時事につれて其日々々の出來事を、ある意味の記事同樣に描き去るのです。時と推し移る新聞には、無論後者の方が大切でせうが、あなたはその方面に於ての成功者ぢやなからうかと私は考へるのです。私が最初あなたに勸めて、年中行事といふやうなものを順次にならべて一卷にしたら何うだらうと云つたのは、是がためなのです。見る人は無論あなたの畫から、何時何んな事があつたかの記憶を心のうちに呼び起すでせう、しかも貴方の表現したやうな特別な觀察點に立つて、自分がいまだかつて經驗しなかつたやうな記憶を新らしくするでせう。此二つの記憶が經となり緯となつて、たゞでは得られない愉快が頭の中に滿ちて來るかも知れません。忙がしい我々は毎日毎日蛇が衣を脱ぐやうに、我々の過去を未練なく脱いで、ひたすら先へ先へと進むやうですが、たまには落ち付いて今迄通つて來た途を振り向きたくなるものです。其時茫然と考へてゐる丈では、眼に映る過去は、映らない時と大差なき位に、貧弱なものであります。あなたの太い線、大きな手、變な顏、すべてあなたに特有な形で描

かれた簡單な畫は、其時我々に過去は斯んなものだと敎へて呉れるのです。過去はこれ程馬鹿氣て、愉快で、變てこに滑稽に通過されたのだと敎へて呉れるのです。我々は落付いた眼に笑を湛へて又齦齬と先へ進む事が出來ます。あなたの觀察に皮肉はありますが、苦々しい所はないのですから。

もう一つあなたの特色を擧げて見ると、普通の畫家は畫になる所さへ見付ければ、それですぐ筆を執ります。あなたは左右でないやうです。あなたの畫には必ず解題が付いてゐます。さうして其解題の文章が大變器用で面白く書けてゐます。あるものになると、畫よりも文章の方が優つてゐるやうに思はれるのさへあります。あなたは東京の下町で育つたから、斯ういふ風に文章が輕く書きこなされるのかも知れませんが、いくら文章を書く腕があつても、畫が其腕を抑えて働らかせないやうな性質のものならそれ迄です。面白い繪說の書ける筈はありません。だから貴方は畫題を選ぶ眼で、同時に文章になる畫を描いたと云はなければなりません。その點になると、今の日本の漫畫家にあなたのやうなものは一人もないと云つても誇張ではありますまい。私は此繪と文とをうまく調和させる力を一層擴大して、大正の風俗とか東京名所とかいふ大きな書物を、あなたに書いて頂きたいやうな氣がするのです。

六月十五日

岡本一平様

夏目金之助

――大正三、六、一五――

『心』自序

『心』は大正三年四月から八月にわたつて東京大阪兩朝日へ同時に掲載された小説である。

當時の豫告には數種の短篇を合してそれに『心』といふ標題を冠らせる積だと讀者に斷わつたのであるが、其短篇の第一に當る『先生の遺書』を書き込んで行くうちに、豫想通り早く片が付かない事を發見したので、とう〳〵その一篇丈を單行本に纏めて公けにする方針に模樣がへをした。

然し此『先生の遺書』も自から獨立したやうな又關係の深いやうな三個の姉妹篇から組み立てられてゐる以上、私はそれを『先生と私』、『兩親と私』、『先生と遺書』とに區別して、全體に『心』といふ見出しを付けても差支ないやうに思つたので、題は元の儘にして置いた。たゞ中味を上中下に仕切つた丈が、新聞に出た時との相違である。

裝幀の事は今迄專門家にばかり依頼してゐたのだが、今度はふとした動機から自分で遣つて見

る氣になつて、箱、表紙、見返し、扉及び奥附の模樣及び題字、朱印、檢印ともに、悉く自分で考案して自分で描いた。

木版の刻は伊上凡骨氏を煩はした。夫から校正には岩波茂雄君の手を借りた。兩君の好意を感謝する。

大正三年九月

――大正三、九、二〇――

木村恒譯『南國へ』再版序

私は貴方の翻譯を拜見しました。

此作家の敍述はなだらかで穩やかで讀んで好い心持がします。それが構造の不自然な所を補ふといふよりも、寧ろ一種の對照になつて現代の小說に見る事の出來ない配合をかたちづくつてゐます。

私が今迄讀んだ小說の中で、好きなものの一つとして何時でも數へたいのはギカー、オフ、エークフイールドでありますが、あの云ふに云はれない愉快な平和な懷かしい空氣の中から、骨組丈を拾ひ出すと矢張り不自然な構造が後に殘ります。然し私は其不自然さへナイーヴな美點として認める位好きなのです。

十八世紀の小說の主人公は、此翻譯の主人の如く諸方をさまよつて夫から夫へと渡つて行くのが例のやうになつてゐます。是は作者の方で作物に變化をつける手段から出たものかも知れませんが、其變化はたゞ眼先の變ると云ふ丈のものですから夫以上のものは望めないのです、又望まないでも好いやうな面白いものも出て來るのです。

同じ十八世紀にピカレスク小說といふ名前のつく一種の小說があります。是は主人公が冒險をしながら方々歩き廻るのが主意で、性質からいふとまづ荒つぽいものですから、日本の講談の仇討位に相當するものでせうが、此翻譯の主人公の平氣な顏をして何處迄も流浪して行く所などは矢つ張り其處から系統を引いてゐるやうです。

大閤記十段目に坊主が湯に入つたかと思ふと、すぐ羽柴筑前守秀吉か何かになつてしまふ所がありますが、十八世紀の小說にもあれ程ぢやないが、甲が乙に化けたり女が男に變粧したりするのがいくらもあります。ジル、ブラスにも、今御話ししたギカーにもあつたと思ひます。此翻譯中にもそれがあるやうですが、私にはそれが馬鹿々々しく感ぜられるよりも、草雙紙の昔の世界に引き入れられたやうで一寸愉快なのです。まだいふ事もありますが是でやめます。此手紙がもし序文として御用に立つなら御使ひになつても構ひません。以上

大正四年一月十三日

木村恒様

夏目金之助

――大正四、二、一〇――

『唐草表紙』序

木下杢太郎著

私は貴方から送つて下さつた校正刷五百八十頁を今日漸く讀み了りました。漸くといふと厭々讀んだやうに聞こえるかも知れませんが、決してそんな譯ではないのです。多大の興味ばかりか、其興味に伴ふ利益をも受けながら、樂しく讀み了つたのです。實をいふと私の都合もあり、又活字組込の關係もありして、長短十八篇の間を休み休み通り拔けたのは、批評を依頼した貴方にも御氣の毒ですし、またそれを御約束した私にも多少の不便は出て來たに相違ありませんが、此陷缺を避ける手段は御互になかつたのですから、それは雙方で我慢する事にして、私の御作に對するざつとした考へ丈を申し上げます。

まづあなたの特色として第一に私の眼に映つたのは、僥かな情緒を濃やかにしかも霧か霞のやうに、ぼうつと寫し出す御手際です。何故ぼうつとしてゐるかといふと、あなたの筆が充分に冴えてゐるに拘はらず、あなたの描く景色なり、小道具なりが、朧月の量のやうに何等か詩的な聯

想をフリンジに帶びて、其本體と共に、讀者の胸に流れ込むからです。私は特に流れ込むといふ言葉を此所に用ひました。もと〳〵淡い影のやうな像ですから、胸を突つくのでも、鋭く刺すのでもない樣です。あなたの書いたものゝうちには、人が氣狂になる所があります。人が短刀で自殺する所も、短銃(ピストル)で死ぬ所もあります。是等は大概裏から書くか、又は極簡單に敍し去つて仕舞はれるので、當り前の場合でも、それ程苦痛に近い强烈な刺戟を讀者に與へないかも知れませんが、それでも、若し以上に述べたやうな詩的の雰圍氣の中で事が起らなかつたなら、あゝした淡い好い感じは與へられますまい。

此ぼうつとした印象が、美的な快感を損はない程度の輕い哀愁として、讀者の胸にいつの間にか忍び込む理由を、客觀的に翻譯すると色々な物象として排列されます。其内で私は歴史的に讀者の過去を蕩搖する、草雙紙とか、薄暗い倉とか、古臭い行燈とか、又は舊幕時代から連綿とつづいてゐる舊家とか、溫泉場とかを第一に擧げたいと思ひます。過去はぼんやりしたものです。さうして何處かに懐かしい匂ひを持つてゐます。あなたはそれを巧に使ひこなして居るのでせう。

單に歴史上の過去ばかりではありません、あなたは自分の幼時の追憶を、今から回顧して忘れられない美くしい夢のやうに敍述してゐます。私は一、二、三、四、と段々讀んで行くうちに此種の情調が、私の周圍を蜘蛛の絲の如く取り卷いて、散文的な私を、何時の間にか夢幻の世界に

連れ込んで行つたのをよく記憶してゐます。私の心は次第々々に其中に引き込まれて、遂に「珊瑚樹の根付」迄行つて全くあなたの爲に擒にされて仕舞つたのです。だから幼時の記憶として其儘を敍述してゐない「夷講の夜の事であつた」に至つて却つて失望しようとしたのです。

私は此種の筆致を解剖して第二番目に遠くに聞こえる物賣の聲だの、ハーモニカの節だの、按摩の笛の音だのを擧げたいと思ひます。凡て聲は聽いてゐるうちにすぐ消えるのが常です。だから其所には現在がすぐ過去に變化する無常の觀念が潜んでゐます。さうして其過去が過去となりつゝも、猶意識の端に幽靈のやうな朧氣な姿となつて佇立んでゐて、現在と結び付いてゐるのです。聲が一種切り捨てられない夢幻的な情調を構成するのは是が爲ではないでせうか。新内とか端唄とか歌澤とか淨瑠璃とか、凡てあなたのよく道具に使はれる音樂が、其上に專門的な趣をもつて、讀者の心を輕く且つ哀れに動かすのは勿論の事ですから申し上げる必要もないでせう。然しあまり自分の好尙に溺れて遣り過ぎた痕迹を殘したのもないとは云はれません。第一編の「硝子問屋」の中にはその筆があまり濃く出過ぎてはゐますまいか。

敍景に於てもあなたは矢張り同じ筆法で讀者の眼を朦朧と惹き付ける事が好であるやうに見受けました。要するに水でも樹でも、人の顏でも凡てあなたの眼にうつるものは、決して彫刻的にあなたを刺戟してゐないやうに見えます。全く繪畫的にあなたの眸を彩どるのだらうと思ひます。

しかもアンプレショニストのそれの如く極めて柔かです。さうして何處かに判然しないチャームを持つてゐます。だから私は「荒布橋」の冒頭に出てくる燕の飛ぶ樣子や、「夷講」の酒宴の有樣を敍するくだりに出會つた時、大變驚ろいたのです。二つのものは平生のあなたの筆で書きこなされたものとは思へない位硬いのです。

要するに貴方の小說に有り餘る程出てくるのは一種獨特のムードでせう。だから夫がまとまらない上に、筋が通らないとか、又は主人公の哲學觀などが露骨に出てくると、一方が一方を殺して、少し平生の御手際に似合はない段違ひのものが出來はしまいかと疑はれます。「荒布橋」とか、「岡田君の日記」とか、「六月の夜」の一部分とかになると、其所に手荒で變に不調和なものが露はれてゐるやうです。其代りよし氣分丈のものでも筋のまとまらない「河岸の夜」といつたやうな、(其中には六づかしい議論も織り込まれてはゐるが)たゞ裝飾的で左程他の情緒をそゝる事の出來ないものもあると申し添へなければならなくなります。惡口の序だから、「北より南へ」といふ短篇の評も此處に付け加へて置きたいと思ひます。あゝ云つた調子のものは、アナトール、フランスの短篇に澤山あります。さうして遺憾ながら彼の方が貴方よりずつと旨いと思ひます。

あなたの作に就いて情調とか、ムードとか云ふものを擧げて、それを具合好く說明すれば、既に大半の批評は出來上つたやうに考へられるのですが、其ムードを作り上げるために、河岸の壽

司屋とか、通りの丸花とか、乃至は坊間の音曲など丈が道具になつてゐるといふ意味では決してないのです。あなたの書き下す人間が、人間として一人前に活動しつゝ、同時に其一篇のムードを構成してゐる事は疑もない事實です。亮さんでも、京さんでも、彼等のする事は皆此兩樣の主意を同時に滿足させてるではありませんか。「三人の從兄弟」などになると、其上に又親父さんの青年に對する反抗的な感情が一篇の主意もしくは哲理として後の方に出てゐます。

次にあなたの理解力に就いて一言其特色を述べたいと思ひます。あなたの頭の働らきは全く科學的でありながら、其濃やかな點が、あなたの情緒の描寫によく調和して、綿密によく行き渡つてゐます。さうして不思議にもそれが普通のありふれた作物のやうに、くだ〳〵しくならないのです。いくら微細な心的現象の解剖でも、又は外觀からくる人間の精密な描寫でも、決して干乾びてゐません。必ず委曲要領をつくすのみならず、其所にあなた獨得の一種の趣が漂つてゐるのです。私の見る所によると其趣はあなたの觀察が突飛に走らない程度で、場合々々に適當な新らしい刺戟を讀者に與へ得るからだらうと思ひます。「靈岸島の自殺」や「船室」の前半の如きは、その方面のいゝ作例と見て差支ないでせう。ことに前者に於て、ある男とある女の性的關係の階級等差が、あれ程細かく書いてありながら、些とも卑猥な心持を起させずに、たゞ精緻な觀察其物として、他をぐい〳〵引き付けて行く處などは、何うしても旨いと云はなければなりません。

此小說は主人公が東京へ出てからの心の變化に、前半程緻密な且つ穩當な、藝術的描寫が缺けてゐるため、多少のむらがあると思ひますが、世間でいふ小說の意味から批判すると、或は壓卷の作かも知れません。

要するに貴方の書き方は絹漉し豆腐のやうに、又婦人の餅肌のやうに柔らかなのです、上部ばかり手觸りが好いのかと思ふと、中味迄ふく〳〵してゐるのです。線でいふと、外の人の文章が直線で出來てゐるのに反して、あなたのは何處も婉曲な曲線の配合で成り立つてゐるやうな氣がします。しかも其曲線のカーヴが非常に細かいのです。外の人が一尺で繼ぎ易へる所を、あなたは僅か一寸か二寸の長さで細かに調子よく繼ぎ足しては前へ進んで行くとしか形容出來ません。其所にあなたの作物には、他に發見する事の出來ないデリケートな美くしさが伏在してゐるのです。もう一つ比喩を改めて云へば、あなたの文章は楷書でなくつて悉く草書です。それも懷素のやうな奇怪な又飄逸なものではありません、もつと柔らかに、もつと穩やかに、さうして時々粹な所を仄かすといつたやうな草書です。

此冗長な手紙が、もし貴方の小說集の序文として御役に立つならば何うぞ御使ひ下さい。私は貴方に對する愉快な義務として、それを認めたのですから。

一月十八日夜

木下杢太郎様

夏目金之助

——大正四、二、一〇——

『硝子戸の中』自序

「硝子戸の中」は大正四年一月十三日から二月二十三日まで「朝日新聞」に連載された著者の小品である。

——大正四、三、二八——

植松安譯『文藝批評論』序

作物を愛讀する人に、文藝とはどんなものか、君の讀破した範圍内で好いから、一括りにした所を敎へて呉れと賴んで見ると、大抵のものは行き詰る。丁度始終人間と交際して生きてゐながら、人間とは何ぞやといふ質問に應ずる事の出來ないのと一般である。

私が昔しさういふ疑問を自分で起して自分で苦しんだ時、英國で出來た書物をあれかこれかと搜して、解決の手掛りにしやうと思つた所、案外參考になるものは少なかつた。英國人の頭腦が一般に實際的であつて綜合と抽象に興味を有してゐないためか、或は特別に文藝方面の研究丈が閑却されてゐたためか、其邊は斷言しにくいが、何しろ斯ういふ種類の著作が英國に乏しかつたことは事實である。

私は日本へ歸つて來てから、英吉利人よりも亞米利加人の方が、却つて自分達と同じ方向に勵いてゐるのではないかといふ氣がし出した。それは私の參考にしやうと思ふ書物がぽつ〳〵亞米

利加人の手によつて發表され始めたからである。然し亞米利加は矢張り亞米利加だとでも云はうか、標題は頗る立派な辭に、取り寄せて見ると、實に中味のない詰らない著述も其中には隨分あつた。

キンチエスターの文藝批評論も實はその時分眼を通したのである。それは今から殆んど十年も前で、丁度出版當時の事と記憶するが、大學の圖書館に入つて、貪るやうな勢で、頁から頁、章から章へと眼を移して行つた私は、大變な愉快を感じた。私はそれが大學の書物である事を忘れて無暗にペンで棒を引いた。あとで自分が新らしいのを買つて、さうして取り換へれば構はないといふ氣も交つてゐた。

私は今其書物の內容を明瞭に覺えてゐない。けれども相當の見識をもつて要領を得た理論が書いてある事丈は慥かだと云つても差支なからふと思ふ。ことに文藝とは何ぞやといふ疑問に解決を與へる著述の少ない英米に於ては、正に有益で必要な刊行物の一つに數へらるべきものであらふと思ふ。

其後三四年してから私は早稻田大學で此書物を參考書として學生に使はせてゐるといふ話を聞いて、內容の秩序ある點から見ても、論旨の高遠に失せざる程度から見ても、普通の講義抔よりも却つて恰好だらふと考へた。

嚴密な意味で十年後の今の私が此書を評したら、潜上の沙汰ながら、或は批判の餘地があるかも知れない。然し十三四年前に讀んだヒルンの「藝術の起原」が去年頃漸く日本に譯されて、しかも有益に行はれてゐる所から見ると、此書を十年後に日本化するのも、決して無駄な仕事でない事は慥かである。ベルグソンの「時と自由意志」などは發表後二十年に至つて始めて英譯された位なものであるから、讀者に其心得さへあれば、譯者の意志に背かないやうに、旨く此書から得た知識を活用出來るのは無論である。

大正四年九月

——大正四、九、二三——

縮刷に際して

——縮刷『社會と自分』自序——

「社會と自分」は大正元年の末に出版になつた私の講演集であるが、今度それを縮刷にしたいといふ事で、發行所から可否の照會があつたから、私は快よく許諾を與へた。

私の講演がもし大正元年に多少なりとも讀者の役に立つたとすれば、大正四年の今日になつても、同じ程度に於て、讀者の役に立つだらうといふ自信を、私は十分有つて居るのである。それは私が偉いといふ意味ではなく、私の說が三年や五年で時勢後れになるやうな際どい題目ばかりに打ち込まれて居ないからである。

大正四年十月

——大正四、一〇、一〇——

『金剛草』自序

松本君が私の文集もしくは文鈔を出したいといふ至誠堂の依頼を取次ぎに見えたのは九月末の事であつた。生憎私は新潮社の請求で「色鳥」といふ同じ種類のものをつい半月位前に公けにしたばかりの所であつたので、君の勸誘を斥けなければならなかつた。「色鳥」でさへ私の本意でないのだからと云つて一應斷つて見た。然し松本君の決意が思つたより頑强なので、斷るのに中中骨が折れた。仕方がないから、ぢやまあ方針を立てゝ、もう少し具體的に研究して御覽なさい、若し相當の書物が編輯される見込が付いたら其時改めて御相談しませうと云つて歸した。

私は固より碌な書物の出來やう筈はないと信じてゐた。一旦手を着けた松本君も屹度撤回するに違ひないと思つてゐた。夫で松本君から電話で再度の面會を申し込んで來た時に、私はわざと會見を避けて手紙で用を濟ました。到底貴方の所期なさるやうなものは出來上らないのだから御已めなさいと忠告した。私もさう本ばかり濫發したくはないとも申し添へた。

所が松本君は短篇小說よりも長い書面を認めて縷々事情を訴へて來た。君は既に私の書物を買ひ集めて鈔錄のためそれを殘らず引き裂いてしまつたとかいふのである。夫から至誠堂へも十の九迄私が承知した旨を明言してしまつたといふのである。今更斷られては本屋に對する自分の信用にも拘はるから枉げて承知して呉れといふのである。其中には下のやうな文句さへあつた。

「濫發と申しますのは他人の作物などに無暗に名義を貸したり又は無責任の著書を續出したりすることです。……併し先生のはそれと違つて只先生の作物が社會に歡迎される爲に處々方々から形を變へて發賣されるのですから、讀書界に於ける先生の勢力の偉大さを示す事實に過ぎないと私は思ひます。若し世の中に著作權といふものがないと假定したら如何です。其時は實行のよい本はどし〳〵飜刻され又鈔出されることでせう。それを世間で不都合と認めるものは誰もありますまい。……若し何か云ふものがあれば夫は嫉みです僻みです。併しそれにも程度がありますが、今度私の御願ひするのは少々方面が違つてゐますから、もう一冊位御許しになつても宜しからうかと存じます」

此長い書面を讀んだ私はとう〳〵承諾を與へなければならなくなつた。それでは中味が「色鳥」と重複しないやうに取捨し、又前者が年代順であるから是は分類風に編輯するやうにと注意した。同じものを縮刷にしたり合本にしたりする上に、方々から其一部分を取り集めて文選樣のもの

を作るのは、著者から見れば一つものを二重にも三重にも讀者に强ひて賣り付けるやうに見えて濟まないのではあるが、それを買ふ人の方から見ると、みんな向き〳〵があつて、薄いのが好きだつたり、厚いのが欲しかつたり、大きいのが飾りたかつたり、小さいのが持ち歩きたかつたりするのだから、それ〴〵相當の需用に應じて出版するのだと云はれゝば私もそれ迄である。著者も成るべく自分の書いたものが世の中に廣まるのは名譽でもあり利益でもあると考へる以上、わざとそれを控へる必要も無からうと思つて、二三新しいものも加へて、とう〳〵松本君の勸告通り此書を公けにする事にしたのである。

大正四年十月五日

――大正四、一一、二三――

題丙辰潑墨

――不折山人著『丙辰潑墨』第一集序――

結社東台近市廛　黄塵自有買山錢　幽懷寫竹雲生硯　高興畫蘭香滿箋
添雨突如驚鷲起　點睛忽地破龍眠　縱横落墨誰爭覇　健筆會中第一仙

漱石山人金

――大正五、九、二五――

解

說

「評論・雑篇」解説

此所に收められた「評論・雑篇」は、最後の序文の一群を除いて、大半東京朝日新聞に掲載された（序文でも、『鶏頭』の序と『煤煙』の序と『新日本畫譜』の序とは、一度東京朝日に掲載された）ものである。『文藝の哲學的基礎』のやうな、可也理論的な、さうして可也長い講演でさへも、明治四十年五月四日から六月四日まで、二十七回に亙つて、東京朝日に掲載された。――もつとも是は、漱石入社直後の事ではあり、講演の初めに漱石と社との間に、それを掲載するといふ約束もあつた事ではあり、社の方から言へば、多少は是で漱石の入社を廣く長く天下に廣告する意味もあつて、東京朝日は、新聞としてこの破天荒事を、敢てしたものではなかつたのかとも思はれる。その後漱石は朝日の爲に幾度も講演にひつぱり出されはしたが、然しその講演の筆記は、『文藝の哲學的基礎』と同じやうに、漱石がそれをすつかり書き改めてしまつても、決して新聞に掲載される事がなかつた。

「評論」のうち、最初の『作物の批評』と『寫生文』とは、讀賣新聞に掲載された。是は漱石が朝日に入社する以前の事である。その上漱石は、朝日に入社する前年、即ち明治三十九年の十一月に、讀賣新聞から入社の勸誘を受けてゐる。その前にも讀賣新聞は、漱石の『文學論』の序を、殆んど一面全部を割いて、月曜附錄に掲載してゐる。さういふ好意が漱石に、讀賣新聞の爲に引き續き筆を執らせる、因緣をつくつたものに相違ない。さうしてこの『作物の批評』と『寫生文』とは、漱石が『猫』その他の小說を書き出して以來の、初めての論文であつた。『創作家の態度』は、漱石が、明治四十一年二月十五日神田の青年會館に於いて、東京朝日主催の講演會で講演したものの筆記を、更に書き直したものである。是は同じ年の四月の『ホトトギス』に掲載された。『田山花袋君に答ふ』・『コンラッドの描きたる自然に就て』・『明治座の所感を虛子君に問れて』・『虛子君へ』・『夢の如し』は、國民新聞に掲載された。是は當時『ホトトギス』の高濱虛子が、國民俳壇の選者をする傍ら、島田青峯と野上臼川とを使つて、國民文學欄の編輯を擔任してゐたからである。『太陽雜誌募集名家投票に就て』は、明治四十二年六月十五日發行の『太陽』臨時增刊『新進二十五名家』に掲載された。是が何故に『新進二十五名家』に掲載されるやうになつたかは、漱石自身が、本文の中で委しく述べてゐる。『「額の男」を讀む』は、大阪朝日に掲載された。是は長谷川如是閑の『額の男』が、大阪朝日に連載された小說だつたからで

ある。

東京朝日では、明治四十二年十一月二十五日から、漱石主宰の下に、文藝欄を設ける事になつた。森田草平がその下働きを勤め、小宮豐隆がそれをすけた。『日英博覽會の美術品』以下『學者と名譽』に至るまでの小評論は、凡てその文藝欄の爲に書かれたものである。漱石は編輯者の立場として、四百字四枚程度の、一回讀切の原稿を歡迎した。さうしてそれは、長くても、三回以上に伸びる事を許さなかつた。漱石自身も亦この原則を遵奉して、自分の原稿を、決して三回以上に亙らせなかつた。その上漱石は、主宰者としての自分が、屢紙面に顏を出す事を遠慮した。是は文藝欄を設ける事にした社の希望に添ふものではなかつたのかも知れないが、然し漱石は寧ろ、なるべくいろんな人の、さうして特に若い人の原稿が、萬遍なく載つて、紙面に變化と生彩とが出る事を計つた。それにも拘はらず『文藝とヒロイツク』以下『イズムの功過』まで、漱石の原稿が毎日のやうに掲載されたのは、漱石の檢閲を通過する事が出來なかつたある原稿を、外に原稿がないといふ理由で、森田草平が無理に印刷に廻してしまつた爲に、漱石を怒らせたからである。當時胃潰瘍の疑ひで胃腸病院に入院してゐた漱石は、外に原稿がないなんていふのなら、俺一人で一週間でも二週間でも書き續けて見せると言つて、是らの原稿を矢繼早に書いて、社に屆けた。

東京朝日の文藝欄は、明治四十四年十月二十四日に、廢止する事に決定された。漱石がどうしてこの事に同意したかは、『書簡集』の中の、明治四十四年十月二十五日小宮豐隆宛の漱石の書簡に精しい。然も文藝欄の廢止とともに、漱石の評論も、朝日で發表される事が少なくなつた。大正元年の『文展と藝術』、大正三年の『素人と黒人』、大正五年の『點頭錄』――長さの點では相當長いものではあるが、漱石はその後、たつた三つしか書いてゐない。是は、池邊三山が東京朝日の主筆をやめた爲もあるに違ひないし、その後絶えず胃潰瘍の爲に惱まされなければならなかつた爲もあるに違ひないが、一方からいふと、漱石はその後寧ろ書をかき畫をかく事に興味を持ち、論文の形で自分自身を表現する興味が、可也薄らいで行つた爲もあるらしい。

もつとも修善寺の大患以後でも漱石は、大阪の朝日新聞の請に應じて、大患後滿一ヶ年の、明治四十四年八月には、明石だの和歌山だの堺だの大阪だので、講演した。その講演の筆記を更に書き直したものが、『道樂と職業』・『現代日本の開化』・『中味と形式』・『文藝と道德』である。是は『朝日講演集』の名の下に、その講演會の時の外の講演と一緒に、朝日新聞社から出版された。その他漱石は、大正二年十二月十二日に第一高等學校に於いて、『模倣と獨立』といふ題で講演した。大正三年一月十七日には東京高等工業學校に於いて、是は題なしで、講演した。（是らの講演の筆記に、漱石は筆を入れてゐない。從つて是らの筆記は『別冊』に收められる。）然し同じ

年の十一月二十五日午後三時からの、學習院での講演は、漱石によつて書き直された上で、學習院の『輔仁會雜誌』に掲載された。是が『私の個人主義』である。然も漱石は、第一高等學校の講演ででも、また學習院の講演ででも、その初めに、近頃の自分の頭の働き方が、かういふ所へ來て組織立つた話をするのに適しないやうな働き方になつてゐるから、講演らしい講演が出來なくてお氣の毒だといふ意味の事を、いつでも斷つた。是は前にも述べたやうに、當時漱石の頭が、書をかき畫をかいて「鬱散」する事の方に、より多く向けられてゐたからである。『文展と藝術』や『素人と黒人』の或部分や『模倣と獨立』の或部分や『津田青楓君の畫』などは、主としてさういふ方面に向いてゐた自分の頭に順應しつつ、其所から漱石が編み出して來た理論的なものだといふ事も出來るであらう。もつとも『津田青楓君の畫』は、漱石が津田青楓から賴まれて、青楓畫會の引札の爲に書いたものである。是は後に『美術新報』に掲載された。

「雜篇」には是まで、序文の一群以外は、『入社の辭』と『元日』と『余と萬年筆』とだけしか收められてゐなかつた。『余と萬年筆』は、丸善の內田魯庵に賴まれて、丸善から發行した『萬年筆の印象』の爲に書かれたものである。『入社の辭』と『元日』とが、朝日新聞の爲に書かれたものであることは、言ふまでもない。同じ朝日新聞に載せられた『虞美人草』の豫告と『三四郎』の豫告と『それから』の豫告と『行人續稿に就て』とが、今度『別冊』から此所に移された。

その他の增加は、凡て新發見の資料である。その中で特に注釋を必要とするものは、『明治天皇奉悼之辭』だらうと思ふ。是は大正元年八月發行の『法學協會雜誌』に掲載されたものである。

當時『法學協會雜誌』の編輯委員は、法學博士山田三良であつた。山田三良の夫人繁子は、作品上の指導を乞ふ爲に、その前から漱石の門に出入してゐた。從つて夫人を通じて山田三良は、漱石と知り合ひになつた。殊に漱石の家と山田三良の家とは、町名は違ふが、目と鼻との間にあつた。それだから山田三良は、恐らく奉悼の辭を、漱石の所に頼みに行つたものに違ひない。漱石はそれを引き受けて、頼まれた翌日とかに、山田三良の所にこの原稿を持つて行つた。その時漱石は、自分は響きだけがあつて意味のない、從つて西洋の言葉には翻譯の出來ない文字を一つも使はなかつた。さうして率直に誠實に、奉悼の意を表現したのだと、言つたのださうである。諸新聞のかういふ機會に用ひる言葉使ひの、「極度に仰山過ぎて見ともなく又讀みづらく」感じてゐた漱石が、簡素に眞實に奉悼の誠を致さうとした點に、いかにも漱石の漱石らしさが躍如としてゐるといふべきであるが、是は當時奉悼文中の名文として喧傳され、一體あれは誰が書いたのだと、人人の間に頻に問題にされたさうである。漱石が明治天皇を愛しまつつてゐた事は、『心』の中の先生の言葉からでも想像する事が出來る。明治とともに生れ明治とともに育つて來た漱石は、その明治を代表しその明治を象徴してゐるやうな明治天皇の崩御を、丁度『心』の先生のや

うに、衷心から悼みまつつたものに相違ない。それでなければ漱石は、いくら山田三良の請だからと言つて、自分に無關係な『法學協會雜誌』に、その編輯委員を代表して奉悼文を書くといふやうな空空しい事は、決してしなかつた筈である。事實また漱石は、明治四十五年七月二十五日橋口貢宛の手紙の中で、「聖上御重患にて上下心を傷め居候今朝の樣子にては又々心元なきやに被察洵に御氣の毒に存候」と書いてゐる。大正元年八月八日森圓月宛の手紙の中では、「明治のなくなつたのは御同樣何だか心細く候」と書いてゐる。

元來漱石は藝術家であるとともに思想家であつた。是は言ふまでもない事である。然しこの事は往往にして、人人から見落される。藝術家としての——精確に言へば、小說家としての漱石が、多くの場合前景に引き出されて、思想家としての漱石が、兎角後景に押しやられるからである。勿論是は、一面から言へば、漱石の藝術の勝利を物語るものであり、漱石が、思想家としてではなく、藝術家として生きなければならなかつた必然を物語るものであつたには違ひない。然し事實は、思想家としての漱石を、その全範圍に於いて確と把握してゐるのでない限り、藝術家としての漱石の、眞正の高さもしくは深さは、容易に把握され得ないと言つて可いのである。漱石の藝術は、漱石の生活の中から咲き出た、華であつた。然も漱石の思想は、同じく漱石の生活を地

盤として成長し、漱石の生活を整理し指導し規定しつつ、漱石の人格を形成する。漱石の藝術が漱石の生活の中から、恰もこの華として咲き出でなければならなかつたのは、漱石の人格が――従つて漱石の思想が、それを要求したからである。一人の藝術家が、人生に於いて、自分の人格に觸れて來たものを、何等かの意味で感覺的なものを通して表現したものが藝術である以上、その藝術家の思想が、その藝術家が人生に於いて、何を、如何に味ふかを決定するものである事は、言ふまでもない。然も思想家とは、その思想に、抽象と論理とによつて秩序を與へ、それを表現し、もしくはそれを根據として、社會百般の現象の、善惡、美醜、正邪、曲直に關する判斷を、單的に表現する者である。その思想家としての漱石を、殆んど全面的に示すものが、此所に一括された「評論」であつた。

勿論漱石は、例へばドイツの哲學者の多くのやうに、自分の思想を抽象と論理との枠にかけて引き伸ばし、それを、全世界を包攝するに足るやうな、大きな體系に織り上げ、仕立て上げる事に、少しも興味を持つてゐなかつた。「僕のはいつでも自分の心理現象の解剖であります。僕にはそれが一番力强い說明です。若しそこに不完全なものがあればそれは心理現象そのものの複雜から來るので方法のわるい點からくるとは考へられません。」（大正三年一月十三日畔柳芥舟宛の書簡）と言つてゐるやうに、漱石は抽象と論理とによつて自分の思想に秩序と體裁とを與へたと

は言つても、その思想は決して、自分が經驗する事の出來ない世界にまで、踏み込んで行く事がなかつた。漱石の思想の中では、「絕對」とか「無限」とか、「死後の生」とか「地球の意識」とかいふやうな、空想する事は出來ても、竟に經驗する事が出來ないやうな世界は、重要な役割を演じる事がないのである。漱石にとつては、自分の心理現象が、言はば自分の全世界であつた。漱石には、解剖しても解剖しても、其所には尙解剖しきれないものが、複雜で細緻で不可思議で神祕で、到底手にをへないと思はれるやうなものが、あとからあとからと、續續出て來るのである。漱石には、その究明と檢討と整理と指導とが、全生涯を費しても、なほ片づけ切れないほどの、大事業であつた。從つて漱石には、その大事業を疎かにして、「絕對」とか「無限」とか、「死後の生」とか「地球の意識」とか、さういふ、自分とは直接に關係のない、餘所餘所しいものに、構つてゐる暇がなかつたのである。勿論それだけに漱石の思想は、經驗的であり、實證的であり、もしくは實踐的であり、多くの哲學の「幽玄」であるのに比べて、遙に「平め」であると言はれ得るのかも知れない。然しそれだけに又漱石の思想は、漱石の生活もしくは人格と、寸分の隙間なしに抱き合つてゐる思想なのである。漱石から漱石の思想を奪ふといふ事は、漱石の生活を、漱石の人格を奪ふといふ事に外ならなかつた。漱石は自分の思想を護り通す爲には、自分の生命を賭して、相手と戰ふ事も、敢て辭しなかつた。――例は卑近に失するかも知れないが、例へば

博士問題である。漱石の博士問題に關しては、當時さまざまに批評されてゐたが、然し漱石の思想から言へば、漱石が博士を辭退するのは、當然すぎるほど當然の事であつた。その事は、此所に收められた『博士問題とマードツク先生と余』や『博士問題の成行』などに就いて見ても、明白である。其所で漱石は「余の博士を辭退したのは徹頭徹尾主義の問題である。」と言つてゐる。當時の當局が、當局の體面を傷つけない範圍で、結局漱石の主義を貫徹させるやうな取計らひをしたから、あれで納まつたが、然し漱石の意志が、その後少しでも枉げられるやうな事があつたら、漱石は恐らくそれに對して、猛然と對抗したに違ひない。その事は、大正三年十一月十二日菅虎雄宛の書簡及び同年同月九日竝に同月十二日岡田正之宛の書簡などによつても、十分想像され得る所である。

勿論漱石のこの主義は、單に博士問題に限つて、發揮されたものではなかつた。明治四十二年五月、即ち博士問題が持ち上がる凡そ二年前、漱石は、雜誌『太陽』が募集した名家投票に、文藝家の第一位に當選した時、博文館からくれる事になつてゐた、金盃を辭退した。さうしてその『太陽』に、自分が何故に是を辭退するかの理由を發表した。また博士問題の持ち上がつた明治四十四年には、五月に『文藝委員は何をするか』を書き、七月には『學者と名譽』を書いた。凡て是らのものは、特定の專門で、特定の人に、特定の榮譽を與へる爲に、その人だけが特に偉く

なつて、外には偉い人が一人もゐないやうな誤解を世間に流布し勝ちな、不公平な、私を伴ひ易い組織・制度に關する、漱石の不滿を述べたものである。――漱石は、自分本位の生活といふ事を、箇人の自由と獨立といふ事を强調する。然し人が自分本位に生活し、箇人の自由と獨立とを享有するといふ事は、漱石にとつて、その人が、他人の自分本位の生活を侵害し、他人の箇人の自由と獨立とを犧牲にするといふ事を意味しない。反對にそれは、人人がその所にゐて、それぞれの義務を履行し限界を守りつつ、自分本位に生活し、自分の自由と獨立とを享有するといふ事である。名家投票や、博士授受や、文藝委員の仕事や、學士院賞の授受は、假令その間に若干の相違はあるとしても、必ず外の人の自由と獨立とを何等かの點で犧牲にする事によつて、特定の人に榮譽が與へられるといふ意味で、共通の弊害を持つてゐる。社會に於いて、少しでもさういふ弊害を取り除き、各人平等に、公平に、箇人の自由と獨立とを保有しつつ、各人自分本位に生活し得るといふ事が、漱石の念願だつたのである。

漱石の自分本位の生活、竝びに漱石の箇人の自由と獨立との意味は、漱石の明石に於ける講演『道樂と職業』の中でも說かれ、また漱石の『文學論』の自序ででも觸れられ、その他いろんな所でいろいろに述べられてゐるが、然しそれは漱石の學習院に於ける講演、『私の個人主義』を精讀するに如くはないと思はれる。此所で漱石は自分が、どうして自分のいふ個人主義者になつた

か、また自分の個人主義とは一體どういふものであるかを、委曲を悉して說明する。——

「僕のはいつでも自分の心理現象の解剖であります」と言つてゐるやうに、漱石はいつでも、自己の問題から出發する。從つて漱石は此所でも先づ、自分が英文學を專攻する者でありながら、どうしても英文學の妙所に味到する事が出來ず、不安と憂鬱との間に、十年近くうじうじしてゐなければならなかつた事を告白する。自分が好いと思ふ所を、英國の學者は好いと思はない。英國の學者が傑作だと稱するものを、自分は傑作だと名づける事が出來ない。然も常識から言へば、鑑賞の權威は向うにあつて、此方にはない筈である。漱石は他人の說を賴りに、その好いとする所を自分も好いと思はうと努力して見るが、いくら努力して見ても、その氣になる事が出來ない。納得する事が出來ない。この矛盾が、他人と自分との間のこの矛盾が、どう解決のしようもない點に、漱石は、いつまでも不安と憂鬱との間に、その日その日を不愉快に過して行かなければならなかつたのである。——この事は、深切に自己の內面を反省し、子細にそれを點檢し得る人である限り、換言すれば、無知と無反省と輕佻とをもつて、何にでもすぐ附和雷同する人でない限り、大きく言へば外國の文化と日本の文化との相違の問題に於いて、小さく言へば他人の考へ方と自分の考へ方との相違の問題に於いて、誰でも一度は必ず出會ふ、さうして根本的に考へて見なければならない、大問題である。是は、單に一文藝の評價のみに關係する問題ではない。一人

の人間が、その生活に於いて、全生活に對して、どういふ態度を把持すべきであるかの、人間一生を貫く大問題である。漱石はロンドンに留學して、この大問題を解決しなければならない、ぎりぎりの所に押し詰められた。

さうして漱石に最後に出て來た結論は、自分は竟に自分である、といふ事であつた。自分が自分で納得の出來ない事は、いくら人から口を酸くして說かれた所で、それは決して自分のものになる事がない。冷暖は自ら嘗めて知るより道がない。他人の舌をまつてそれを知らうとする前に、自分は自分の舌で嘗めてそれを知るべきである。——其所に初めて漱石の、自分本位の世界の樹立が始まつた。さうして漱石は、文藝に於いて、何故に自分と他人との評價が是ほど違ひ得るか、それは民族・時代・流行・年齡・箇人の相違から來るには違ひないが、その相違は元來どういふ所にあるか、然もさういふ相違を超えて、更に根本的な所で文藝が、共通して人を動かす所のものを持つてゐるとすれば、それは一體何であるかを、根本的に、客觀的に、科學的に闡明しようと努力し出した。是が漱石の有名な『文學論』の、成立過程である。不幸にしてその『文學論』は、その後漱石の歸朝以來の俗事と漱石に沸きたぎつて來た創作欲との爲に、言はば足代を組んだままの形で殘される事になつてしまつたが、然し漱石がその時樹立した自分本位の世界は、是が一文藝の評價に關する問題ではないだけに、爾後の漱石の一生を支配して渝らなかつた。さう

して是が漱石の個人主義の根幹を形成するのである。

人が一旦自分の中に、自分本位の世界を樹立する以上、その人が、假令他人から笑はれても何でも、自分の感じる事、考へる事、信じる事を、正直に他人の前に披瀝し得るだけの、勇氣を持つ事を必要とする事は、言ふまでもない。といふ事は同時にその人が、自己にツルーであり、又ツルーであり得る爲に十分自己に通じてゐる必要があるといふ事を意味する。それは、自分で自分を正しく認識する事の必要である。然も人は、自分で自分を正しく認識する以上、その人は必ず謙遜となり、從つて精進を促がされ、一人前の「人間」として恥づかしからぬだけの、正しい判斷と高い見識との獲得へと押し出される。從つて人が、眞正に自分本位であり得る爲には——例へば、内に省みれば必ず空腹を感じてゐる癖に、他人から甘やかされ、自ら自らを僞つて、自分本位らしく振舞つてゐるのは、馬鹿殿樣の自分本位である、眞正の自分本位ではない——自分本位であり得るに足るだけの、重い義務を脊負はされる。それは、自分に對する義務と他人に對する義務とである。自分に對する義務が、不斷に自己に對してツルーである事と、ツルーであり得る爲に不斷に内省を忘らない事と、同時に正しい判斷と高い見識との獲得に、不斷に精進する事である事は、言ふまでもない。他人に對する義務とは、他人の立場に對する十分な思ひ遣りを持つ事である。自分が自分本位である事を欲するが如くに、他人も又自分本位である事を欲する

に違ひない。その意味で他人の自分本位を尊重し、如何なる場合にも、それを傷つけまいとする事である。自分が自分で自分の廻りに境界線を引いて、その中で自分の自由と獨立とを確保しようとする以上、その境界線を踏み越えて、他人の領域を侵す事は、眞正の自分本位の生活に於いては、赦すべからざる越權に外ならないからである。

この事は、然し、言ひ易くして行ひ難い事であつた。殊に人が、他人と自分とを比較して、自分の方が判斷に於いてより正しく、見識に於いてより高い事を信じる場合、自分の意見を相手に強ひる事なしに、相手が自分に自然に感化される時期を待たうと覺悟するなどといふ事は、「人間」としての十分な鍛錬を豫想しない限り、普通の人には、到底不可能の事であつた。自分で自分の自分本位の世界を樹立した漱石も亦、痛切にこの困難を嘗める。漱石は『鑑賞の統一と獨立』の中で、自分が嘗て自分本位の世界を樹立した事を述べた上で、「各自の舌は他の奪ひがたき獨立した感覺を各自に鳴らす自由を有つてゐるに相違ない。けれども各自は遂に各自勝手で終るべきものであらうか。己れの文藝が己れだけの文藝で遂に天下のものとなり得ぬであらうか。それでは情ない、心細い。散り〳〵ばら〳〵である。何とかして各自の舌の底に一味の連絡をつけたい。さうして少しでも統一の感を得て落ち付きたい。……余は此暗示を今確的に客觀的に指摘する程頭の燒點が整はないのを憾みとする。さうして此矛盾を理路を辿つて調和する力のないのを殘念

に思ふ。けれども一方に於て個人の趣味の獨立を說く余は、近來一方に於てどうしても此統一感を驅逐する事が出來なくなつたのである。」と言つた。是は漱石の自分本位の上に與へられた、一つの大きな試錬であつた。自分本位の世界を樹立した漱石は、他人の立場に對する思ひ遣りの爲に、他人の自分本位を尊重し、他人の自由と獨立とを尊重する。然しその爲め漱石は、自分で苦しまなければならないのである。自分の方がより正しく、自分の方がより高いと、自分に信じられるにも拘らず、自分が相手に强ひて、相手をして自分の信じる如くに信じしめようとする事は、自分を人間以上の存在であると想像するのでない限り、他人の自分本位に對する、侵害である。他人の自分本位を侵害して省みないならば、自分にも自分の自分本位を樹立する事は許されない筈でなければならない。――此所に漱石の苦しみの根本があつた。

『鑑賞の統一と獨立』は、明治四十三年七月二十一日に發表されたものである。同じ七月三十一日と八月一日との『好惡と優劣』に於いても、漱石はこの問題について考へ續ける。然も大正三年の『私の個人主義』で、漱石がこの事に就いて言つたことは、この主義が「黨派心がなくて理非がある主義だから、我は我の行くべき道を勝手に行く丈で、さうして是と同時に、他人の行くべき道を妨げないのだから、ある時ある場合には人間がばら〳〵にならなければな」らない、從つて「其裏面には人に知られない淋しさも潛んでゐる」のだといふ事であつた。深切な反省と

高邁な見識とを持つてゐた漱石は、此所で「道理」に支配されて生きる事の少ない人間の世界に、人人が「道理」によつて統一される事を希望しつつ、竟にこの「淋しさ」に堪へ通して、嶮難極まりなき自分の「個人主義」の道をあるき通さうとする覺悟を、若い人人の前に宣言するのである。

自分の生活に自分本位の世界を樹立し、箇人の自由と獨立とを尊重する漱石が、文藝の世界に於いて、あらゆる箇性を尊重し、その箇性にとつてツルーなものをツルーに表現した作品である限り、いかなる種類の作品であつても、それに敬意を持つ事を忘れなかつたといふ事は、當然の事である。漱石が作品を批評する標準は、にせ物か本物か、內から出たものか外からの借り物かではあつても、(例へば『艇長の遺書と中佐の詩』など)ナテュラリズムかロマンティシズムか、シムボリズムかリアリズムかにあるのではなつた。從つてそれが、一つの型によつてあらゆる作品を評價し、好惡はともかく、それによつて優劣の差別をつけようとする、固陋偏狹な批評家の態度を擯斥する意見となつて現はれるのは、是亦極めて當然の事であつた。漱石は旣に明治三十八年五月の『新潮』に於ける『批評家の立場』と題する談話に於いて、齋藤信策が坪內逍遙の『新曲浦島』を批評した態度が、一つの型によつて、それとは違つた型のものを評價しようとする弊に墮してゐる事を、指摘したが、明治四十年一月一日の『作物の批評』に於いても、作物批

評の標準は、作物の性質によつて、それぞれ違はなければならない事を論じてゐる。同じ年の一月二十日の『寫生文』は、その『作物の批評』の理論を適用して、當時『ホトトギス』派の人人によつて唱道されてゐた寫生文の本質、もしくは寫生文の見方を說いたものである。明治四十一年十二月、高濱虛子の『鷄頭』の爲に書かれた序文も亦、その『作物の批評』の理論の適用であつた。當時の文壇に於いて頻に問題にされたのみならず、竟にはそれが漱石の作品の特徵であるとまで刻印を打たれた「低徊趣味」といふ名前は、此所で虛子の寫生文の特徵を道破する爲に、イブセンなどの作品に現はれた「推移趣味」に對立するものとして、漱石によつて初めて命名された名前である。無論漱石は、是を、自分の作品の山の上に押し立てる、旗印としようなどとは、夢にも思つてゐなかつた。漱石が自分の中に「低徊趣味」を持つてゐた事は爭はれない。又それだからこそあれだけ適切な解剖が可能であつたには違ひないが、然しその事とそれを自分の旗印としようとするといふ事とは、全然關係のない問題である。

明治四十三年七月二十三日の『イズムの功過』も亦、この部類に入れて考へて可いであらう。多樣で、複雜で、動いて已まない人生を、一つのイズムで、然も西洋から借り入れたイズムで統一しようとする事の、無理と不自然とが、此所では論じられる。明治四十四年八月の堺に於ける講演、『中味と形式』に於いて取り扱はれてゐる問題も亦、詮じつめれば、形式は中味の爲に存在

するが、中味は形式の爲に存在しない、從つて、形式に拘泥して中味をその形式で無理に押へつけようとする者は、變化してやまない流動する人生を、狹い、動かない、凝滯したものにしようとする者に過ぎないといふ事に歸著する。明治四十年四月、美術學校に於ける講演『文藝の哲學的基礎』も、この立場から見れば、文藝の題材とすべきものは無限であり多樣である、そのうちから眞一つだけを取り出して來て、それが文藝であるといふのは勝手であるとしても、それ以外に文藝はないといふのみならず、その眞を重んじるの餘り、それと同等の權利を持つてゐる善の、善・美・壯・その他の理想を蹂躪して憚らないといふに至つては、竟に許し難いといふ主意を取り扱つたものである。

明治三十九年・四十年・四十一年へかけて、日本の文壇では、自然主義の運動が盛んであつた。勿論この自然主義の提唱には、時代の趨勢に促がされた、歷史的な必然性もあつたには違ひない。然しそれと同時に此所には、無知と無反省とによる、ジャーナリスティックな文壇政策が働いてゐた事も爭はれない。人人は特殊な新聞・雜誌をその宣傳機關として、盛んに黨同異伐に耽り、必要以上に他を貶し、必要以上に弱小者を脅かした。例へば泉鏡花などは、何所へ行つても原稿が買つてもらへない。買ふといふ約束のあつた所でも、鏡花の原稿を買ふやうなら、俺達は一切お前の所には原稿を書いてやらないぞと、編輯者が恐喝された爲に、その約束を破棄してしまひさ

へしたといふ。その爲め文壇は狹隘となり、調子が低くなり、理非が混亂し、曲直が顚倒し、上下を擧つて歸趨する所を知らない、無政府狀態に陷つた。勿論この間に立つて、漱石は悠悠と、自分のあるくべき道をあるいて行つた。然し漱石にとつて、理論上自分も亦其所に所屬してゐる筈の文壇が、それほど亂脈になり、それほど野蠻になつてゐるといふ事は、到底默止してゐるに忍びない事であつた。從つて漱石が、自分本位の立場から、箇人の自由と獨立とを尊重するといふ立場から、文壇が灰色の一色に塗り潰される事を欲しなかつたとともに、横暴を極め放埒を極める自然派の人人の無知と無反省とに、はつきりしたアンティテーゼを置いて、自然主義のみが文藝ではないといふ事、もしくは自然主義とは元來如何なるものであるかといふ事、特に自然主義の「自然」とはいかに解釋すべき言葉であるかといふ事を、根本的に解決しようとしたといふ事は、當然の事であつたと言つて可い。『文藝の哲學的基礎』もその一つである。『創作家の態度』もその一つである。明治四十四年六月十八日長野の教育會で、多少違つた形で講演され、次いで六月二十八日の東京帝國大學美學會で講演され、更に大阪の公會堂で講演された『文藝と道德』もその一つである。『作物の批評』も、『寫生文』も、『鷄頭』の序も、明治四十一年十一月七日の『田山花袋君に答ふ』も、明治四十三年二月一日の『客觀描寫と印象描寫』も、同じ年の七月十九日の『文藝とヒロイツク』も、『イズムの功過』も、亦その餘響であつたといふ事が出來る。

然し『文藝の哲學的基礎』や『創作家の態度』や『文藝と道德』を見ても分かるやうに、漱石が試みた、自然主義と自分自身との對決は、丁度『文學論』の成立過程の場合のやうに、十分眞面目で、且つ十分根本的であつた。勿論漱石にとつて、日本の文壇で問題となつた自然主義——換言すれば、明治文學史上に於ける自然主義は、言はば齒するに足りないものであつたに違ひなかつた。然し、その自然主義の粉本となつた、十九世紀後半のヨーロッパの文壇を風靡した自然主義は、藝術家としての漱石にとつても、また思想家としての漱石にとつても、それを自分自身の內部に體驗しつつ、その特質を探り、自分の中にあるものとないものとを、もしくは自分の中に採り入れて然るべきものと然るべからざるものとを、はつきり辨別する必要のある主義であつた事は、言ふまでもない事であつた。漱石は、文壇の流行とは離れて、自分自身獨立に、その考察の中に深入りする。さうして漱石は、『文藝の哲學的基礎』に於けるよりも『創作家の態度』に於いて、また『創作家の態度』に於けるよりも『文藝と道德』に於いて、次第に深く、自然主義の本質に穿貫して行くのである。

例へば漱石は『文藝の哲學的基礎』に於いては、モーパサンの頸飾の話のやうなものを、眞が善を侵す場合の一例として、その存在理由を許容しない。然し『創作家の態度』に於いては、ゴーンクールの『ラ・フォースタン』の結末に寫し出された眞を、それが普通の意味から言へば十

分不人情な事であつたにも拘はらず、新しい眞を描き出したものとして、許容する。然も漱石は『文藝と道德』に於いて、ロマンティックな道德とナチュラリスティックな道德と――文藝上の流派を思想的な人生觀上の問題に移して、ある意味ではロマンティックな道德よりもナチュラリスティックな道德の方が、進歩した道德であるといふ事を、說いてゐるのである。同時に文藝に於いても、ロマンティシズムの作品とナチュラリズムの作品との相違を、ロマンティシズムの作品は「人の氣を引立てるやうな感激性の分子に富んでゐるには違ないが、どうも現世現在を飛び離れてゐるの憾みを免かれない。妄りに理想界の出來事を點綴したやうな傾があるかも知れない。よし其理想が實現出來るにしても之を未來に待たなければならない譯であるから、書いてある事自身は道義心の飽滿悅樂を買ふに十分であるとするも、其の實己には切實の感を與へ惡いものである。之れに反して自然主義の文藝には、如何に倫理上の弱點が書いてあつても、其弱點は卽ち作者讀者共通の弱點である場合が多いので、必竟ずるに自分を離れたものでないといふ意味から、汚い事でも何でも切實に感ずるのは吾人の親しく經驗する所であります。……元來自分と同じやうな弱點が作物の中に書いてあつて、己と同じやうな人物が其所に現はれて居るとすれば、其弱點を有する人間に對する同情の念は自然起るべき筈であります。又自分も何時斯う云ふ過失を犯さぬとも限らぬと云ふ寂寞の感も同時に之に伴ふでせう。己惚の面を剝ぎ取つて眞直な腰を低くするの

は、寧ろさう云ふ文學の影響と言はなければなりません。若し自然派の作物でありながら斯ういふ健全な目的を達することが出來なければ、夫こそ作物自身が惡いのであると云はなければならない。」と言つてゐるのである。

是は少くとも、當時の文壇で提唱された、自然主義ではない。同時に是は亦、フローベールやモーパサンやゾラによつて唱道された、自然主義でもない。是は、さういふ自然主義と共通するものをも持つてゐるが、然し是は、寧ろさういふ自然主義の中から、自分の營養になるものを十分吸ひ取つて出來た、さうして自然といふ言葉に獨特の意味を盛つた、新しい自然主義である。この自然主義の背後には、熾烈な道義心が燃えてゐる。高遠な理想が輝いてゐる。高慢で、輕薄で、遜る事を知らない人間に、遜る事を敎へる意味での、現實の暴露が豫想されてゐる。この自然主義は、單に人間を畜生の域に引き下げる爲にのみ、「己惚の面を剝ぎ取」るのではない。反對に、人間を神的なものに引き上げる爲に、「己惚の面を剝ぎ取」るのである。――さうしてこの自然主義こそは、漱石が『彼岸過迄』以後、絕えず遵奉して渝はらなかつた自然主義であつたのに外ならない。然もこの自然主義こそは、既に明治四十一年の『坑夫』に於いて、その萌芽を示してゐる所のものである。ただに『坑夫』のみではない。淡白と正直とを鼓吹し、「己惚の面を剝ぎ取つて眞直な腰を低く」しようとする試みは、既に『猫』に於いて、その第一回の初めから試み

られてゐる事なのである。

自然主義の自然は元來、天地山川の自然から來る。天地山川の自然が、人間に對して公平無私である如くに、人は人間に對して、公平無私でありたいと念願する。それは他人に對する場合のみではない。自分自身單獨の行住坐臥に於いても、自然が自然である如くに、自然であり、私から解放されてありたいといふのが、漱石の自然主義である。『三四郎』の中の廣田先生は、「人格上の言葉に翻譯する事の出來ない輩には、自然が毫も人格上の感化を與へてゐない」と言つてゐる。人間が自然を師とするとは、要するに、自然を人格に翻譯して受け取り、それを自分の人格の上に深切に作用させるいふ事である。漱石は嘗て自分の弟子に「吾師自然」といふ額を書いて與へた事があつた。然も自然をわが師とするといふ事は、それを高い、廣い、深い、もしくは正直で、淡白で、陰日向がなくて、穩かで、靜かで、人間に及び難い、人間以上の人格として受け取るといふ事である。從つて漱石にとつて、自然主義の自然とは、例へば性慾生活を取り扱ふのも、人間の自然を描くのであるといふ意味での自然ではなくて、性慾生活を營む爲に人間が私だらけなものになるとすれば、その私をはつきり認識して、出來得る限りその私を乘り超え、それと一つのものになりたいと庶幾せしめる意味での、自然であつた。この意味での自然が、漱石に既に早くから問題になつてゐた事は、漱石が二十三の年に書いた、『木屑錄』が證明する。漱石が

二十七の年に書いた『英國詩人の天地山川に對する觀念』も亦、十八世紀の末から十九世紀の初めへかけてイギリスに現はれた自然主義――自然を對象として、それに對する自分の態度を、さまざまに歌ひ上げた、自然主義――の詩人達の、自然に對する態度の、獨特な檢討を發表したものであつた。

勿論自然に對するかういふ考へ方、特に自然を師として、私を去る修業をしようとするやうな考へ方は、純粹に東洋風の考へ方――禪と茶と俳諧との傳統を多分に血脈の中に漲らしてゐる、日本風の考へ方であると言へるのかも知れない。漱石といへども、その點で自分が純粹な日本人であつたと言はれる事を、恐らく決して否定しなかつたに違ひない。事實また漱石が、自分は日本人であるとともに夏目漱石であるといふ事の、はつきりした認識の上に立つてゐたればこそ、『文學論』のやうな著述を、十年計畫の下に、思ひ立つたのだとも、言へるのである。然し自分は日本人であるといふ事、さうして自分は夏目漱石であるといふ事の、はつきりした認識は、とかくさうであり勝ちのやうに、漱石を、「鎖國攘夷」の思想に導かないで、言ひ得べくんば「開國利夷」の思想に導いた。西洋の文化の尊敬すべき點と擯斥すべき點と、自分の營養に資すべきものと資すべからざるものと、竝びにそれとの關聯に於いて、日本の文化の尊敬すべき點と擯斥すべき點と、日本人の中の發展せしむべきものと發展せしむべからざるものと、さういふ點をはつ

きり把握して、とるべきはとり捨てべきは捨て、伸ばすべきは伸ばし摘むべきは摘んで、日本を世界的な文化勢力にまで高めたいと願つた者が漱石なのである。その意味で漱石は、愛國者であつた。漱石ほど西洋文化の恩惠に浴してゐる者は少ない。然し漱石ほど西洋文化にかぶれる事のなかつた者も少ない。漱石の持つてゐるものをあれほどの高さに磨き上げたものは、日本の文化ではなくて、西洋の文化である。然も漱石をあれほどの高さに磨き上げさせたものは、日本人としての、夏目漱石の天稟である。

然し漱石は愛國者なるが故に――西洋の文化の長所と弱點とがはつきり分かり、日本の文化の長所と弱點とがはつきり分かつてゐる愛國者なるが故に――眞面目に日本の爲に憂ひた。殊に漱石は、明治維新以來急激に西洋文明を輸入した日本が、西洋のそれと歩調を合せようとして、借著の重荷に喘ぎながら、血眼で駈けずり廻つてゐるのを見て、日本の未來の爲に寒心せざるを得なかつた。それは『猫』の中ででも『虞美人草』の中ででも『三四郎』の中ででも『それから』の中ででも、その他方方で觸れられてゐるが、特にそれだけを取り出して問題にしたものは、明治四十四年八月十五日の、和歌山に於ける講演『現代日本の開化』である。

其所でも漱石は、日本の將來に關して、極めて悲觀的な結論に達した。漱石は、現在日本人のやつてゐる事は、內發的ではない。外發的である。日本人の現狀からいふと、日本人の文化は

「機械的に變化を餘儀なくされる爲にたゞ上皮を滑つて行き、又滑るまいと思つて踏張る爲に神經衰弱になる」と言つた。然も自分はそれに對する對策で、是ぞといふ名案を持ち合せてゐないと言つた。「只出來るだけ神經衰弱に罹らない程度に於て、內發的に變化して行くが好からうといふやうな體裁の好いことを言ふより外に仕方がない。」と言つた。――然しこの「內發的に變化して行く」といふ言葉は、漱石の懷抱する思想から見ても、又漱石自身の、現在西洋文化の恩惠を最も多く蒙つて育つて來た一人としての、體驗から考へても、可也重大な示唆であつたやうに思はれる。それは第一に日本人が、漱石の意味での自分本位の立場に、確と自分の足場を据ゑて、自分自身の內面の要求を反省しつつ、舶來の刺激を批評して受けとり、自分自身の生命を、自然に大きく育てて行く必要がある事を、指示してゐるからである。その點でこの對策は、前日明石で講演された『道樂と職業』とに關聯する。又その翌翌日の堺での講演『中味と形式』とも關聯する。又後年の『私の個人主義』とも關聯する。漱石が文壇に於ける自然主義の提唱にアンティテーゼを置いたのも、一つは、丸呑みの西洋かぶれに現はれた、さうして足元を踏み固める事を忘れてお祭騷ぎに目の眩んだ、日本人の無反省と輕薄とを、日本の未來の爲に憎んだからである。更に、多少の誇張を敢てして言へば、この對策は、漱石が、自分の作品全部の形に於いて、日本人の前に提供してゐるとも言ふ事が出來るのである。

漱石は『現代日本の開化』以後、日本文化の現在もしくは將來といふやうな、一般的の問題を、暫くの間、取り扱はなかつた。是はさういふ問題に興味がなくなつたからといふよりも、一つには漱石にとつて、もつと焦眉の問題が出て來て、その爲めさういふ事を考へて見る、餘裕がなかつたからであると思はれる。既に漱石は大阪の公會堂で講演をしたすぐあとで、胃潰瘍再發の爲に倒れ、其所で入院しなければならなかつたのみならず、屢繰り返したやうに、その後は殆んど毎年のやうに、この病氣の爲に、一月か二月かは、病床に横たはつてゐなければならなかつた。死は常に漱石の目の前にあつた。從つて漱石は何よりも先づ、自分が死ぬといふ事を常に念頭に置き、死と自分との對決に、全力を擧げて取りかからなければならなかつた。その間には漱石は、自分の義務としての、年一回百回内外の、小説を書かなければならなかつた。その上漱石は、明治四十五年以來、病後の衰弱した身體に、丁度適切な「創作」活動として、ぽつりぽつりと畫をかいたり書をかいたりし始めた。その事は、漱石を次第に牽きつけて行つた。死の問題によつて、もしくは私の問題によつて、絶えず陰慘なまた重鬱な世界に閉ぢ籠められなければならなかつた漱石は、畫をかき書をかく事によつて、纔にその不快から救はれた。――かうして漱石の前には、日本の文化の現在と將來といふやうな問題を取り上げる、機會と餘裕とは、當分現はれる事がなかつたのである。

然し大正五年になつて、それは、竟に漱石の前に現はれたやうに見えた。大正三年七月にヨーロッパ大戰の火蓋が切られ、大正四年一年を經過しても、尙その結果がどうなるのか、まるで見通しもつかないやうな狀態になつたからである。是は一日本の問題ではなく、世界の問題であり、ある意味では、世界を根本から變化させるやうな大問題であつた。さうして漱石は、それを中心として起伏するさまざまの問題に、熱心な考察の眼を向けなければならなかつたからである。勿論漱石は、根本的な意味では、「元來事の起りが宗教にも道義にも乃至人類に共通な深い根柢を有した思想なり感情なり欲求なりに動かされたものでない以上、何方が勝つた所で、善が榮えるといふ譯でもなし、又何方が負けたにした所で、眞が勢を失ふといふ事にもならず、美が輝を滅ずるといふ羽目にも陷る危險はない」と信じてゐた。然し「もう少し低い見地に立つて、もつと手近な所を眺め」て、漱石はこの戰爭が、政治上、經濟上、思想上、その他あらゆる方面にあらゆる影響を及ぼすべき事を覺悟してゐた。殊に漱石の問題になつたのは、ドイツの軍國主義である。もしくは、相互に交戰してゐる國國の國家主義である。漱石はこの戰爭を、その方面を中心として觀察した。其所へ朝日新聞から漱石に、大正五年の元日から、暫らくの間連續する讀物を要求して來た。その要求に應じて現はれたものが、漱石の『點頭錄』である。

然しその『點頭錄』は、『また正月が來た』といふ序曲を以つて始まり、『軍國主義』四回、『トラ

イチケ』四回、合計九回、それも元日に一回出て、十日・十二日・十三日・十四日と四回續き、それから十七日・十九日・二十日・二十一日と又四回續いただけで、中絶されてしまつた。是は「リョマチで腕が痛みますつゞけて机に凭る事が出來ません」（大正四年十二月二十五日、山本松之助宛の書簡）だの、「左の肩より腕へかけて鈍痛はげしく」「兎に角醫者の手に合はず困り入候現に原稿などをかくのが非常の苦痛と努力に候」（大正五年一月十九日、松山忠二郎宛の書簡）だのと漱石が言つてゐるやうに、漱石は腕が痛んで、思ふやうに原稿を書く事が出來なかつたからである。もつとも是が糖尿病から來る痛みで、リョマチから來るのでなかつた事は、後になつてから分かつたが、然し漱石はその痛みに堪へかね、且は中村是公の勸誘もあつて、到頭原稿を書く事は一時斷念し、一月二十八日に、湯河原へ轉地しなければならなかつた。其所から歸つて來て、二月十八日に漱石は山本松之助宛に、「私はリョマチで轉地を致しまして二十日ばかり留守にしました一昨十六日晩歸りました點頭錄をすぐ〳〵べつたりにして濟みません　轉地中に稿をつぐつまり（取）でありました所先方に知つた人があつて一所にのらくらして居たものだからつい御無沙汰を致しました　歸つてからあとをどうしたものだらうかと考へてゐます」と書いた。漱石は何か氣ぬけがしたやうな心持になつてゐたらしいが、然し社の方から書けと言はれれば、書き續ける積りであつたには違ひない。然し山本松之助からは、恐らくもう書かなくても可いと、返事し

て寄越したものであらう。『點頭錄』はそれきり掲載されなかつた。さうして我我は、『軍國主義』と『トライチケ』とだけで、それと關聯した、ヨーロッパ大戰を機緣とする、諸種の思想問題に關する、漱石の意見を、竟に聽く事が出來なくなつたのである。

勿論漱石が『點頭錄』で、『軍國主義』と『トライチケ』とに就いて書いたあとで、なほ是に關聯する問題を、果して取り扱はうとしてゐたものであるかどうかは、疑問であつたと言つて可いであらう。然し『日記及斷片』の中の、或は『點頭錄』の爲の心覺えではなかつたかと想像される部分を見ると、其所には「〇軍國主義論、軍國主義ハ方便、目的ニアラズ故ニ時勢遲れなり」といふのがあるかと思ふと、その隣には「獨乙の「力」の考と佛蘭西の「力」の考」といふのがある。八行とんで「〇トライチケ」といふのがあるかと思ふと、二行とんで「〇老人雜話。佛蘭西ノ捕虜物語」といふのがある。その隣には「〇アナトールフランスの」といふのがあるかと思ふと、又その隣には「〇歐洲戰爭　宗教、社會主義、經濟、人道、皆國家主義に勝つ能はず」といふのがある。是を漱石が『點頭錄』の中に、みんな書く氣であつたかどうかも不明であり、よし又書いたとしても、それをどう書いたかは問題であるには違ひないが、然し漱石がヨーロッパの大戰に、思想的に興味を持つた事は確實であり、然も『點頭錄』を始めたものが『軍國主義』であり『トライチケ』であつた以上、是に續くものが、主として是らのものと關聯した、さうし

てヨーロッパの大戰から得られた、漱石の思想的考察であつたに違ひないと想像する事は、それほど突飛な想像ではなかつた筈である。その想像が私に、『點頭錄』が、漱石の當初に考へてゐたやうに、十分書き悉されないうちに、尻切れになつてしまつた事を、切に遺憾に感ぜしめる。暫く振りで見られた思想家としての漱石の「顏」が、見えたかと思ふとすぐひつこんでしまはなければならなかつた事が、遺憾なのである。然も、大正五年といふ年が、漱石をして小說『明暗』未完成のままに殘さしめたのみならず、正月早早既に『點頭錄』をも未完成のままに殘さしめてゐる事が、更に遺憾なのである。

序文の一群に關しては、特に言ふべき事もない。ただ一つ言つて置きたい事は、既に前にも述べたやうに、漱石の自分本位は、他人の自分本位に對する十分な思ひ遣りを條件としてゐるが、その漱石の他人の自分本位に對する十分な思ひ遣りが、此所で、極めて鮮明に現はれてゐるといふ事である。漱石は、自分本位である事を失ふ事なしに、實に丁寧に他人の世界の中に這入り、其所から實に精到に、他人の世界の美しさを攫み出して來てゐる。是は『鷄頭』の序、『煤煙』第一卷の序、『明治維新三大政治家』の序、『土』の序、『唐草表紙』の序などを讀んだ人には、恐らく誰にでもすぐ氣のつく事だらうと思ふ。「卒業論文をよんで居ると頭腦が論文的になつて仕舞には自分も何か英語で論文でも書いて見たくなります。決して猫や狸の事は考へられません。僕は

何でも人の眞似がしたくなる男と見える。泥棒と三日居れば必ず泥棒になります」(明治三十九年五月十九日、高濱虛子宛の書簡)と漱石は言つてゐる。漱石の特徵は、どういふ他人の心持にも、十分になつて見る事が出來るといふ點にある。換言すれば、どういふ他人の心持にも、十分なつて見る事が出來るほど、漱石の中には、いろんな心持があつたといふ點にある。從つて漱石の自分本位は、もしくは漱石の個人主義は、普通所謂自分本位、もしくは普通所謂個人主義とは、全然違つた內容を持つてゐるのである。是は更に改めて、說明する事を要しない。

昭和十一年二月二十日

小宮豐隆

2208

昭和十一年三月五日印刷
昭和十一年三月十日發行

漱石全集第十三卷

著作權者　夏目純一

編輯及發行　漱石全集刊行會

右代表者　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地　岩波茂雄

印刷者　東京市神田區錦町三丁目十一番地　白井赫太郎

印刷所　東京市神田區錦町三丁目十一番地　精興社

（大森製本）

987
19
53

終